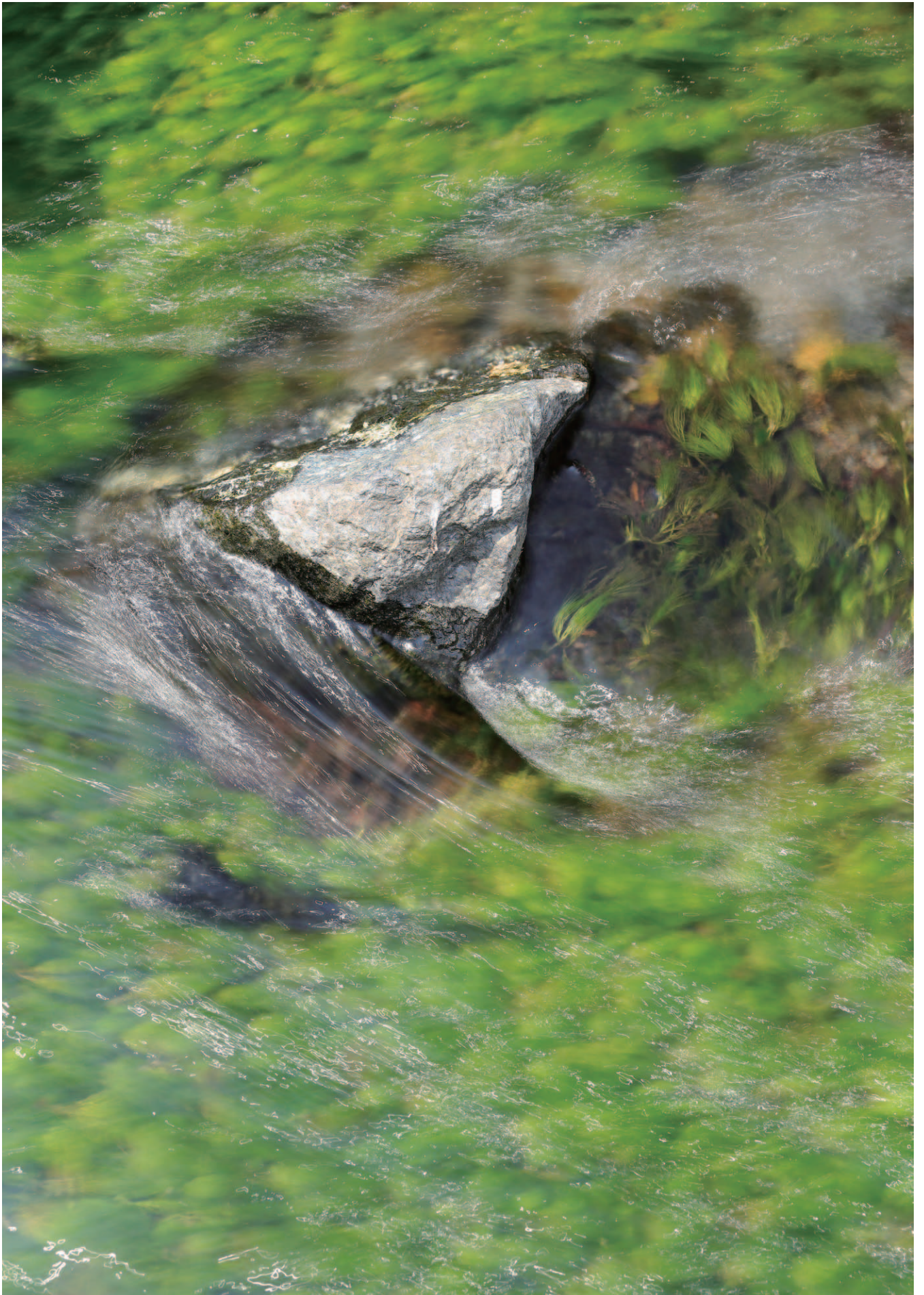


水の文化

水による
心の回復力

水の文化 October 2015 No.

51



源流付近の清冽な水。地中から湧き出した一滴一滴が集まり、生命を支える川となる 写真：小川秀一/アフロ



川の話

梨木 香歩 さん

作家

九州山地の外れ、わりに標高の高い場所に山小屋をつくってから、もう四半世紀が過ぎた。たまに行くだけだが、そのくらい長い間縁を持っていると、自然に地元の人とも知り合いになる。

その中でもHさんの経歴は異色だ。もう八十は過ぎていらっしゃると思われるが、もともとは子爵の次男で神奈川県にお住まいだった。十代の頃、家庭教師をしてくれていた米国人の女性に恋いこがれて周囲の反対を押し切り、彼女について米国に渡った。結婚し市民権を得、軍隊に入った。軍隊に入れば無料で大学で学べるというシステムに引かれてである。除隊後メリーランド大学の水産学部に入り、院で研究を続け、魚類博士になった。そのうち日本の地方の国立大学から招かれ帰国、教授職についた。時代はバブル景気の頃で、Hさんはクルーザーで釣り三昧、米国仕込みの豪華な生活を送っていたが、株かなにかで大失敗し、財産をすべてなくし、おまけに奥様まで難病で亡くした。すっかり自暴自棄になり、電車に乗って九州の外れで降り（ここが私の山小屋のある場所に近かったのだ）、その小さな温泉旅館で下足番として働いていた。数年後、教え子たちが、足跡を辿ってたずねてくるまで（Hさんはそれまで経歴を明かしていなかった。旅館の女将さんは、やっぱり、と頷いたそうである）。

今はその旅館を辞して、近くの川のそばに山小屋を建て、一日一組限定のレストランなどをしている。たまに地元の新聞に

環境問題のことなどについて文章を書くこともある。昔は大きなアメリカ車に乗り馴れていたのかもしれないが、今は自転車で山道を行き来する生活だ。

そのHさんに、地元の川の源流に連れて行っていただいたことがある。

道は途中で立ち消え、小さな流れに沿って歩くと、やがて水底から一つ二つ、空気が浮き上がるように水が湧いてくる場所があった。傍らには、湿った、黒っぽい岩壁が覆い被さりばかりにそそり立ち、一面にイワタバコの花が咲いていた。イワタバコのあれほどの群生は、そのとき初めて見た。勧められて飲んだ足元の水は、清らかで体が悦ぶのがわかった。それから少し下ったところで、私たちは小さな釣りをした。川遊びをしたいという私の要望に応じて下さったのだ。さっきのような、純度百パーセントのようなところには、生きものはあまりいないんです、きれいすぎて。この辺りで、ようやく、小さな魚ぐらいいは出てくる。そう言いながら、簡素な釣り道具を取り出した。私たちは河原の石を裏返し、カゲロウの幼虫を針の先にくっつけて、カワムツを釣った。食べるとしたら唐揚げかしら、と私が言うと、こうやって、と、Hさんは小さなカワムツを頭から丸ごと呑み込んだ。目を丸くしていると、だいじょうぶ、きれいなもんです、と笑った。Hさんは、こんなふうに、今、川べりで命を繋いでいるのだ、と思った。太平洋で海釣りをしていたHさんは、川を遡り、ほんの少し、命のにぎわいがある、そんな場所を見つけたのだった。



梨木香歩（なしき かほ）

1959年生まれ。小説作品に『西の魔女が死んだ』『家守綺譚』『沼地のある森を抜けて』『ビスタチオ』『f 植物園の巣穴』『雪と珊瑚と』『冬虫夏草』など、エッセイに『春になったら苺を摘みに』『ぐるりのこと』『水辺にて』『渡りの足跡』『鳥と雲と葉草袋』などがある。

特集 水による心の回復力

水の文化51号 2015年10月

人はなぜ、水辺や水のある空間（水空間）に足を運ぶのだろうか？

水空間が人を惹きつける理由はいろいろあるが、水には人を癒す力があるとよくいわれる。もしそれがほんとうならば、日常生活によって生じた緊張感を解きほぐし、「ホッとしたい」という「安らぎ」が得られるからではないか。さらに、そこから一歩進んで「明日への活力」を得る側面もあるのかもしれない。編集部ではそれを「水による心の回復力」と定義した。

その本質に迫るため、現代に生きる人々が「心の回復力」を求めて集まっていると思われる水空間に関する事例やシーンを切り取った。それによって、現代人が水のどんなところに魅力を感じているのか、また水空間を提供する側はどのように活用しているのかを探っていききたい。

久しぶりに集まった友だちと語らう。足湯がリラックスさせるのか、笑いの絶えないひと時を過ごしていた（しこつ湖鶴雅リゾートスバ水の謠「草々（そうそう）の湯」）

目次

巻頭エッセイ

ひとしずく

2 川の話

梨木香歩

特集 水による心の回復力

概説

6 生きづらい社会における水辺の価値

上田紀行

Interview

10 日ごろ使わない神経を「水辺」が刺激する

古賀良彦

Scene1

12 水中を浮遊するクラゲに癒される

新江ノ島水族館

Scene2

16 日本庭園における水への眼差し

——作庭家・重森千青さんに聞く

重森千青

Scene3

20 感性を刺激する「滝時間」

——心と体をリセットして、生きる力を取り戻す

坂崎絢子

Scene4

24 「御舟かもめ」クルーズに見る〈都市の川面〉の魅力

御舟かもめ

Scene5

27 「水」を活かしたリゾート戦略

——しこつ湖鶴雅リゾートSPA 水の語の「競争しない個性」

しこつ湖鶴雅リゾートSPA 水の語

Scene6

30 人と人をつなぐ健康ランド

——風呂をインフラとする「サードプレイス」

平針東海健康センター

文化をつくる

33 「水空間」に浸ると身も心も軽くなる

編集部

水の文化書誌 42

34 河川の復元を図る

古賀邦雄

連載

食の風土記 3

36 米と杉と鉱山が生んだ「きりたんぼ」

魅力づくりの教え 3

38 出る杭がつくる「選ばれるまちづくり」

——石巻は人口減少社会の先端型か？ 宮城県石巻市

中庭光彦

Go! Go! 109 水系 8

44 恐ろしくも美しい魔性の川 黒部川

坂本貴啓

センター活動報告

50 5年目に突入した「里川文化塾」

51 編集後記／ご案内

(敬称略)

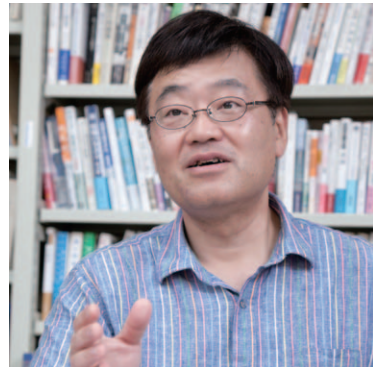


生きづらい社会における

水辺の価値

水辺あるいは水空間は人に何をもたらすのか、現代社会に生きる私たちの「心の回復力」につながるものなのか――。スリランカで「悪魔祓い」のフィールドワークを行ない、そこから「癒し」の観点を提示した文化人類学者の上田紀行さんに、現代社会の問題点から「癒し」の本来の意味、そして水辺の価値などについてお聞きした。





上田 紀行 さん
うえだ のりゆき

文化人類学者

東京工業大学 リベラルアーツセンター 教授

1958年(昭和33)東京都生まれ。東京大学大学院博士課程修了。愛媛大学助教授などを経て2012年(平成24)から現職。1986年(昭和61)からスリランカで「悪魔祓い」のフィールドワークを行ない、「癒し」の観点をもっと早くから提示して注目される。2006年(平成18)にはインドでタライ・ラマ14世と2日間にわたって対談。2016年4月から始まる東京工業大学の教育改革を主導する。著書に『人生の〈逃げ場〉』(朝日新聞出版 2015)、『人間らしさ 文明、宗教、科学から考える』(KADOKAWA 2015)、『ハツとしない私が、「これじゃ終われない」と思ったときのこと』(幻冬舎 2015)など。

なぜ現代社会は 生きづらいのか

日本はどんどん生きづらい社会になっていくようです。道行く人の顔は皆疲れきっていて、生きる喜びに満ちあふれているようには見えません。どうして、こんな世の中になってしまったのか。まずは人類の歴史を遡って考えてみましょう。

サルが直立猿人になったのがおよそ700万年前で、ホモサピエンスになったのは約20万年前とされています。農耕が始まったのは1万年前なので、700万年という時間軸で見ると99・8%、ホモサピエンスの歴史で考えて95%の間、人類は狩

猟採集によって暮らしていました。

狩猟採集民は、獲物を追って小さな集団で移動しながら生活します。狩猟などの財産をもちません。獲物も保存できないので、その場で全員が平等に分け合います。そうすれば自分が獲物を獲れないとき、誰かが分けてくれる。彼らはそうやって集団のサステイナビリティを保っていました。

ところが、農耕生活に入ると、人間は土地を区画して定住し、収穫した穀物を貯め込むようになる。こうして農耕社会では、貧富の差や身分の差が生まれました。

さらに時間性も変化しました。狩猟採集民はその日暮らします。獲物

が獲れば大喜びし、獲れなければがっかりするだけ。一方、農耕民は数カ月先の収穫を目標に、毎日黙々と労働する。つまり収穫という未来の目的のために、今の喜びをじっと我慢して生きるわけです。しかし、それでは人間は行き詰まってしまいます。ですから村社会では収穫祭などの祭りを催しました。「仕事は大変だけど楽しいことがある。生きていくって幸せだ」という解放感を仲間とともに味わい、生きる喜びや集団の絆を回復するのです。

ところが、今はそうした喜びや絆を結ぶ場が少なくなりました。農耕社会をベースに発展してきた現代の産業社会では、財産を蓄え、昇進やマイホームといった未来の目的のために、今を我慢して生きています。みんな自分のことで手いっぱいです。「生きづらい」と感じるのも無理ありません。

誤解されたままの 「癒し」の意味

私はスリランカ南部の村で、「悪魔祓い」について研究することがあります。スリランカは独立するまでの150年間、イギリスの統治下にあ

ったため、各地に西洋医療の診療所が開設されています。私が訪れた当時は診察代や薬代は基本的に無料で、病気になる病院に行くことがあたりまえ。そういう社会ですが、彼らは西洋医学では治らないような心や体の病を「その人に悪魔が憑いている」状態と考え、村人総出で悪魔祓いを行います。といっても、恐ろしい儀式をするわけではありません。その実体は「楽しい村祭り」です。

ごちそうを用意してみんなで集まり、夜通し歌ったり踊ったりする。最後に仮面をかぶった悪魔が出てきて、ダジャレや下ネタを言って大笑いする。悪魔憑きの人も、それを見て楽しい気持ちになって思わず笑い出す——。それで悪魔は去っていくのです。

悪魔祓い師に、どんな人が悪魔憑きになるのか聞くと、「孤独な人」という答えでした。自分がいなくても誰も関係ないといった疎外感に苦しむ人が、悪魔に取り憑かれてしまうのです。

そう考えると、実は日本人の方が悪魔憑きではないか、という気がします。孤独や疎外感が強くなるとどうなるか。リストカットやひきこもりで

右:まもなく日が落ちるといのに、名残惜しいのか皆
海辺を離れない(神奈川県三浦半島・森戸海岸)

社会との絆を断つことで自分を守るか、ひどい場合は「誰でもいいから殺したい」といつて刃物を振り回したりする。実際、そんな事件が頻繁に起きていますが、私が危惧するのは、そうしたニュースを小さいときから何度も見ること、日本の子どもたちの心に「人は、孤独になると刃物を振り回して社会に復讐するものなんだ」というイメージが定着してしまうことです。

それに対して、スリランカの悪魔祓いは悪魔憑きの人だけを助けるのではなく、見ているまわりの人々も救済しています。人は誰でも病むことがあるけれど、みんなが集まって回復させてくれるし、助けてくれるという子ども頃の頃から目に焼きつけることで、生きることの安心感、社会への信頼感が育つのです。

私はこの思想を「私を癒し、世界を癒す」という言葉で日本に紹介し、「癒し」ブームのきっかけになりました。しかし、ブームとなった「癒し」は、いつしか「何かに癒された」という受動形になっていました。

私が本来伝えたかったのは、絆を取り戻して世界をもっと生きやすい場所にし、傷ついている自分自身も癒してあげようという、きわめて能

動的なムーブメントです。癒されたその先で、自分が何をすべきかを考える。自分のなかに世界を癒す力を発見することこそ、「私を癒し、世界を癒す」という言葉の真意なのです。

今、誰かを「愛する」よりも誰かに「愛されたい」と願う人が多いですね。愛にマーケットがあるとすれば、愛を供給する人が少ないために、愛の奪い合いになっていきます。「癒し」が「癒されたい」という受け身一辺倒になってしまったのもうなずけます。しかし、受け身の「癒し」を消費するだけでは前に進めません。「何を愛するのか」「何にわくわくするのか」というスタンスで、自身がエネルギーをもち、「世界も、自分も変えていこう」という意識をもつ必要があります。

〈複線化〉によって 人生をしなやかに

では、今の日本社会で生きづらさから脱却し、エネルギーをもって生きるにはどうしたらいいのでしょうか。

私は、人生を〈複線化〉することが鍵だと思っています。単線、つまり一つの評価だけで生きている人は、それがだめになつたらおしまいです。

生きる喜びを感じられるもう一つの世界をもつことが大事です。

複線化は人生の〈逃げ場〉をつくるとも言えます。苦しいときは、今いる場所から逃げ出していいのです。社員なら勇気をもって2週間の有給休暇を取得してください。2、3日の休みは疲れをとるだけで終わりますが、2週間あれば自分がやりたいことに時間を使えます。映画をたくさん観る。秘境を旅する。そんな時間を毎年もつことができれば、どんなことがあっても意外と耐えられるものです。

仕事以外に「自分がわくわくする何か」を見つけてもいいのだという心の余裕が、人生をしなやかに、そして強くするのです。

いきなり2週間の有給休暇は難しくかもしれませんが、日常から離れられる、自分のためのちょっとした〈逃げ場〉は確保すべきです。疲れたとき、水辺をぶらっと歩きたくなるのも、無意識に逃げ場を求めているからではないでしょうか。

水辺は私たちと

異界との境界線

20代の前半、私は精神的に追い詰



められてどん底状態でした。落第して留年し、カウンセリングに通っていました。そんなとき、沖縄の竹富島にシュノーケリングに行ったのです。沖縄のサンゴ礁の海に潜ると、そこには竜宮城のようにきらきらと美しい光景が広がっていました。

当時、私は虚無主義的に、世のものはずべて見方によって変わると考えていました。ところが沖縄の海は、否定できない絶対的な美しさとして私の心を打ちました。

海から上がって民宿に戻った後も、「今はもう見えなくても、たしかに海はそこにある」と感じるようになりました。自分はこの大きな美しい存在とともにこの世界に生きていて、そして自分が消えた後も、海は永遠



人工的なものが一切ない水辺。光と風と生きものの気配に息をのむ

に存在しつづけるのだと思うと、言
いようのない至福感と解放感に包ま
れたのです。それは、私の人生にと
ても大きな影響を与えた体験でした。
人はなぜ、海や川などの水辺に惹
かれるのでしょうか。地球は陸と海
できています。少なくとも都会に

生きる私たちは、農耕生活の延長で
陸上の限られた土地を区画し、狭い
エリアに家やビルを建て、固定され
た社会生活を築いています。人間は、
いつ見ても同じソリッドなものがあ
ると安心します。だから同じかたち
のビルをたくさん建てますね。つい

つい確実なものを求めてしまうので
す。

ところが、海や川に満ちている水
は流動的です。常に動いており、区
画することも、固定することもでき
ません。水面の輝きだって、一瞬た
りとも同じ光はない。それは明らか
に私たちが陸上に営んでいる日常の
世界とは違う〈異界〉です。水辺は、
陸の世界と水の世界を分ける境界線
なのです。

つまり、私たちが水辺に立つとき、
自分の属する世界と、もう一つの世
界の両方を感じることが出来ます。
この世の価値が一つではないことを
実感できる場なのです。それが水辺
の大きな魅力なのではないでしょ
うか。

「母なる水」を好む日本人

都会で暮らしていると、雨が降つ
て水田が潤うといううれしさの感覚
がありません。かといって、瑞々し
い森が水で涵養されていることを実
感するわけでもない。ですから、川
や噴水といった「動く水」に対する
飢餓感は大いにあると思います。水
辺に行ったときに解放感を感じる理
由もそのあたりにあるのではないで

しょうか。

かつて東京は水の都でしたが、
徐々に埋め立てられ、東京オリンピ
ックのとき、一気に水辺がなくなっ
てしまいました。運河や堀をもう少
し残しておけば、東京に住む人たち
の意識はもつと多様性のあるものに
変わっていたかもしれません。

そもそも日本人は母なるものへの
思いが強いですね。父なる一神教の、
水に恵まれない砂漠から現れてきた
宗教の人たちとはそこが違う。西洋
社会は父性的に物事を決断していく
けれど、日本社会はそうではない。
日本人がお風呂を好むのは「何かに
包まれる」という母性的な原理が働
いているからでしょう。

「溶け込む」という言葉があります。
よくよく考えてみると、これは水に
まつわる比喩です。沖縄の海に潜っ
たとき、私はたしかに世界に溶け込
むような不思議な感覚を覚えました。
それは、母親の胎内で羊水に浮いて
いた幸せの記憶なのかもしれませ
ん。おもしろいですね。

水、そして水辺とは、生きづらい
社会で生きていかざるを得ない私た
ちにとって必要な〈なにもの〉かだ
と思います。

(2015年9月3日取材)

日ごろ使わない神経を 「水辺」が刺激する

日々感じる何かしらのストレスは、「三つのR」に表されるストレス対処法によって軽くすることができるといふ。そして、滝を眺めたり、川辺で穏やかな時間を過ごすといった「水空間にふれること」でも同じような効果が得られるようだ。私たちが心身を健やかに保つヒント、そして水辺が人の心にもたらす価値について、精神科医の古賀良彦先生に語っていただいた。



古賀 良彦 さん
こが よしひこ

杏林大学医学部精神神経科学教室教授
日本ブレインヘルス協会理事長

1946年(昭和21)東京都生まれ。1971年(昭和46)慶應義塾大学医学部卒業。医学博士。1976年(昭和51)杏林大学医学部に転じ、助教授、主任教授などを経て現職。うつ病、睡眠障害、統合失調症治療・研究のエキスパートとして、日本催眠学会理事長、日本薬物脳波学会副理事長なども務める。著書に『いきいき脳のつくり方』(技術評論社 2010)、『早引き 心の薬事典』(ナツメ社 2011)など。

ホッとしすぎは逆効果!?
理想は「ところてん」の状態

私たちが心身ともに穏やかに過ごすには、どのような精神の状態がベストだと思いますか?

日常的に感じる「ストレス」や「ホッとする」といった感覚は、自律神経と大きく関係しています。自律神経は交感神経と副交感神経からなり、交感神経はストレスなどを感じ緊張した状態、副交感神経はそれとは逆の働きをする神経です。通常

両者はバランスがとれていて、「ホッとする」という感覚は、副交感神経の働きが交感神経よりも少しだけ上回った状態です。

とはいえ人間は難しいもので、気持ちやゆるみすぎてもよくありません。理想は、やわらかなのほどこよい緊張感があり崩れない「ところてん」のような精神バランスです。私たちは、自分でこのような状態を積極的につくり出した方がいい。ストレスは頭痛や不眠などを引き起こす「心身症」の要因になりますので、



そのつどうまくやりすごすことが大切なのです。

そこで、「三つのR」に表されるストレス対処法をご紹介します。

① Rest (レスト=休養)、② Relaxation (リラクゼーション=くつろぎ)、③ Recreation (リクリエーション=活性化)です。ストレスの語源は「歪む」。

体も気持ちも歪んでしまった状態は、休んでリラクセスすればそれ以上悪化はしませんが、元には戻りません。ストレスのない丸い円の状態に、自分をつくり直す必要があります。

「休んで、くつろいで、積極的に自分をつくり直す」。これを力まず、でも意識して、毎日少しずつ心がけることで、ストレスは溜まりにくくなります。

「水辺」は人にとってよい状態をつくる

具体的に何をすればよいのでしょうか。それは、ちよつとした楽しみをもち、一瞬でもいいので「夢中」になることです。条件は、簡単でお金がかからないもの、しかも日替わりでできるものだ、なおよいです。例えば、忙しいから夕食をコンビニ二弁当で済ませる人がいますが、卵

焼きなど一品だけでいいのでつくってみる。たくさんだと準備や後片付けがたいへんですから。料理をする一瞬夢中になりますよね。何かに夢中になってそれしか考えない瞬間をもつことが、ストレスをやりすごすことにつながります。

そういった意味では、今回のテーマである「水辺」も「三つのR」を巧まずして満たしてくれるものだと思います。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。」と鴨長明が『方丈記』で記しているように、川はいつも新鮮なものです。滝や湖もそうです。ずっと同じところに同じ水があるわけではなく、刻々と変化しています。そもそも、水があれば、そこには生命がある可能性がきわめて大きい。水から生まれた人間という存在をみんな無意識に感じていて、だから水のたつぷりあるところに行くとき懐かしい感じがしたり、くつろいだ気分になると思うのです。

カナダのバンクーバーを旅したときにおもしろいなと思ったのが、滝や川、湖など水のそばに行くと、不思議なことに人間はあまり動かなくなるんです。無とは違いますが、静かになります。水辺は気持ちをゆつ

たりさせ、何も考えない穏やかな瞬間ができるのでしょうか。それがレストやリラクゼーションを満たします。公園でも、芝生だけの公園に寝転ぶより、水場があるほうが長くくつろげると思うのです。

さらに、水辺に行くまでのプロセスがリクリエーションになりますね。自転車を走らせれば、風をきる新鮮な感覚が味わえます。リラクゼーションということでは、水族館のクラゲを見てると同様の効果を感じる人が多いようです。おそらく、あの人間の想像を超えた動きが魅力を感じさせるのでしょう。

また、特に滝などは、落ちたら大変なのでほどよい緊張感があります。危険とはいわないまでも、やや気を引き締めながら心洗われる感じがありませんか？ 副交感神経寄りであるみすぎるのではなく、交感神経がよい緊張感を支えている。滝を眺めることは、人間にとって非常によい精神のあり方に近いのではないのでしょうか。

日常とは違う世界に一瞬でも連れていく

私たちの日常のほとんどの場面は、

テレビやパソコン、スマートフォンが支配する「オーディオビジュアル」の世界だといわれています。つまり五感がありながら、「見る」「聞く」の二つしか使っていないのです。しかし、水辺は私たちが普段使っていない感覚をもたらしめます。

水辺に行くと、水にさわってたり足を浸けたりという行為を、自然にやろうとしませんか？ また、湖でも川や滝でも、森の香りや生きものなど、必ず新鮮な「匂い」があります。このような感覚は、オーディオビジュアルだけで味わうことはできません。普段使っていない感覚を自然のなかで刺激する。それが、自分を一瞬でも日常とは違う世界に連れていく。だからリクリエーションにつながるのだと思います。

それは、なにも遠方である必要はありません。歩いて、あるいは自転車で行ける近所の水辺で十分です。同じ川でも、日によってまったく違うはず。ちよつと雨が降れば、匂いも、水の色も、気温も違う。そういうことをほんの少し意識するだけで、いつもとは違う新鮮な刺激に出合える。水辺とは、そういう場所なのではないでしょうか。

(2015年8月5日取材)

水中を浮遊する クラゲに癒される

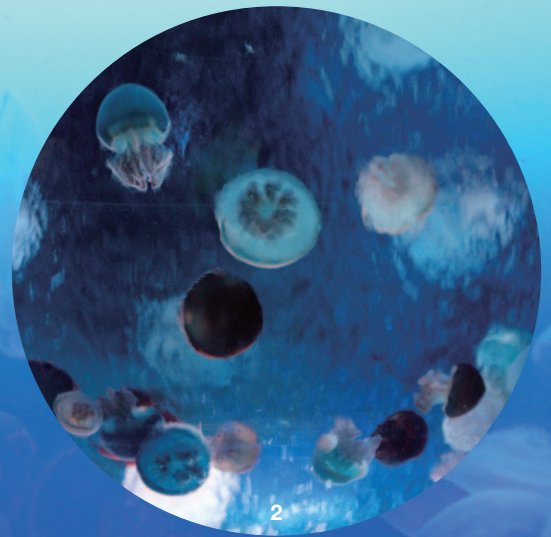
水中でふわりふわりと泳ぐクラゲが「癒される生きもの」として人気を集めている。得体のしれない姿であり、しかも毒をもっているので苦手な人もいるはずだが、いまや全国各地の水族館がクラゲの飼育・展示に力を入れている。クラゲの何が私たちの心を癒すのか。クラゲ展示の先駆けとして知られる新江ノ島水族館（神奈川県藤沢市片瀬海岸）を訪ね、人気の理由を探った。

クラゲの飼育展示に 先駆けた水族館

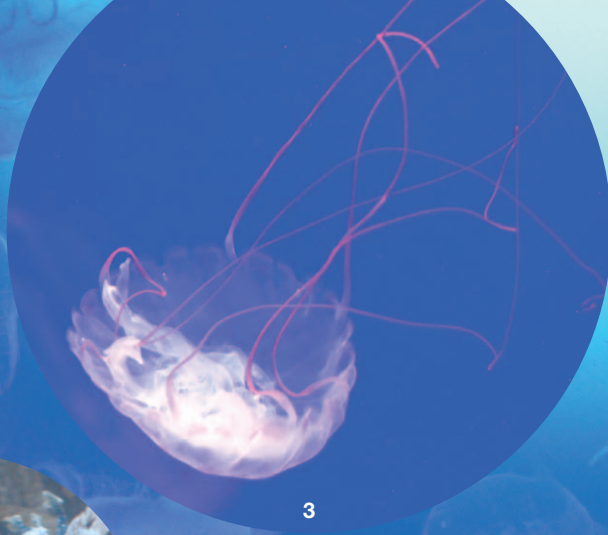
目の前が相模湾の砂浜。夏ともなれば海の家で賑わう。潮風の心地よい絶好の場所に新江ノ島水族館は位置している。

日本全国に水族館は数あれど、ここはクラゲの飼育と展示にいち早く着手したことで名高い。1954年（昭和29）、旧江の島水族館オープンと同時にクラゲは水槽にいた。「初代館長が生物の進化・系統の学問的な観点からクラゲは外せないと考えたのと、葉山の御用邸に近いことも理由の一つです」と話すのは、学芸員でクラゲの飼育技師、足立文^{あや}さん。クラゲの研究者でもあった昭和天皇は、御静養の折、しばしば水族館まで足を延ばされたという。

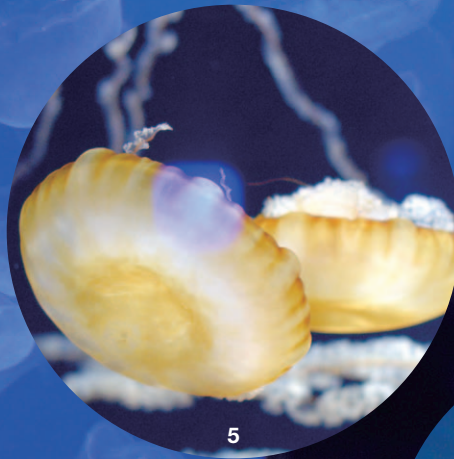
1973年（昭和48）、人工飼育の難しいミズクラゲの一生を水槽内で再現することに成功し、常設展示が可能になった。さまざまなクラゲを飼育し繁殖する試行錯誤を積み重ねた結果、1988年（昭和63）には世界初のクラゲ専門展示館「クラゲファンタジーホール」を開設。1993年（平成5）、長年にわたる飼育繁殖の功績が認められ、日本動物園



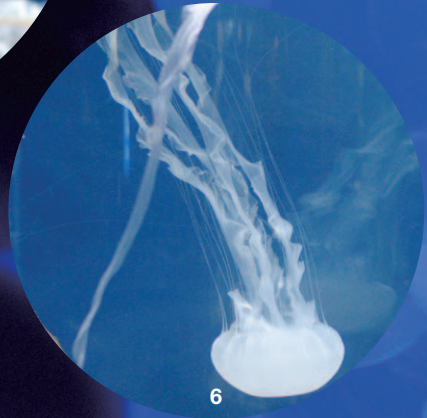
2



3



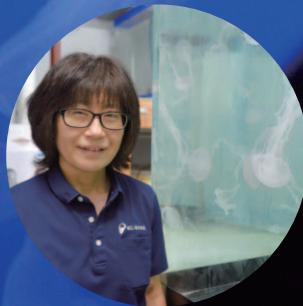
5



6



4



1

新江ノ島水族館 展示飼育部の学芸員・飼育技師の足立 文（あだち あや）さん。琉球大学大学院理学研究科修了（生物学修士）後、旧・江の島水族館入社。2004年より新江ノ島水族館勤務。入社以来一貫してクラゲを担当している

水族館協会から海産無脊椎動物では初めての古賀賞（注）を授与された。2004年（平成16）に新江ノ島水族館（愛称「えのすい」）としてリニューアル後もクラゲファンタジーホールは幻想的な癒しの空間として人気を集めている。

変幻自在に浮遊する 多種多彩なやわらかさ

絡んだクモの糸のような触手を水槽いっぱいにつくりにゆつくり広げるサムクラゲ。鮮やかな赤い触手をひたすら長く伸ばし、ゆるやかに漂うアカクラゲ。優雅にたなびく口腕が天女の羽衣を想わせるインドネシアンシーネットル。その名のとおり紫の縞模様が見えきれいで、米西海岸産なのに蛇の目傘そっくりのパープルストライプドジェリー。

ふわふわとたゆたうのもいれば、ぴよぴよと向きを変えるのも、ゆらゆら流れてゆくものもある。赤、桃、橙、黄、紫——変幻自在に浮遊する無色透明な（やわらかさ）に多種多彩な（差し色）が入った自然の見事な造形には恐れ入るしかない。

ぼーっと見ているだけで、水に漂うクラゲの優雅でゆるやかなリズム

（注）古賀賞

希少動物の繁殖に功績のあった動物園や水族館に対して贈られる国内最高の賞。日本動物園水族館協会の育ての親、上野動物園初代園長・古賀忠道博士の業績を記念して1986年（昭和61）に制定された。

- 1（メイン写真）真昼の空の満月のようなミズクラゲ。成体は傘の直径が15～30cmくらいになる
- 2ブルーと名がついているものの、カラーバリエーションが豊富なブルージェリー
- 3美しいピンク色の体と口腕をもつパープルストライプドジェリー
- 4水玉模様の傘と8本の口腕をもつタコクラゲ
- 5パシフィックシーネットルの橙色は表皮の色。その下の中身は無色透明なのだという
- 6絹のようなやわらかさ、なめらかさを感じるインドネシアンシーネットル。口腕が非常に長い

に引き込まれ、せわしなさに磨り減り尖っていた心の角が丸くなる。水のなかで奏でられる形と色と動きのシンフォニーは、いつまで眺めていても飽きない。「リピーターのお客さまも多い」（足立さん）のがうなずける。

旧江の島水族館の時代、1997年（平成9）に初めて癒しをテーマにしたイベント展示「クラゲのリラクゼーション」を開催した。その後、全国の水族館の定番的なテーマ設定となる「クラゲII癒し」の先駆けも「えのすい」だった。

「クラゲのゆったりしたリズム」と「すりガラスのような、やさしい透明感」がクラゲの魅力だと足立さんは考えている。

だから、エンターテインメントに走った過剰な装飾はしない。「光の演出も、あくまでクラゲ本来の美しい色を際立たせるためのものです」（足立さん）。

丸みを帯びたデザインが和やかさを感じさせることから、クラゲファンタジーホールの水槽の窓や解説パネルの四隅の角は丸くしてある。2013年（平成25）に登場した球型水槽「クラゲプラネット（海月の惑星）」も、より美しく癒されるクラゲ展示を追求したものだ。

おなじみの姿は一時期で、脳も心臓もなく生きている

10分間のクラゲショー「海月の宇宙」が始まった。壁と天井にプロジェクションマッピング（CGによる特殊効果の視覚演出）で江ノ島の海の動画が映し出される。気がつけばクラゲファンタジーホールはクラゲの傘を模したドーム状。「クラゲは人よりも魚よりも恐竜よりもはるか昔、地球に誕生しました。特別なところに棲んでいる生きものではありません。江の島のまわりにもたくさんクラゲがいます」のナレーションとともに、周囲の海面がせり上がる。巨大なクラゲの体内に抱かれた観客を海へと誘う趣向だ。

ミズクラゲの一生が再現された。よく知られた容姿で海を漂うのは、ほんの一時期にすぎない。卵から孵った幼生は岩などにくっつき、小さなイソギンチャクに似た姿になる。やがて体がくびれ、皿を重ねたような形に変わって、その一枚一枚が離れて浮遊し、おなじみの格好のちびクラゲへ。

観客から「ああやって生まれるんだ！すごいすごい、初めて見た！」と感嘆の声がもれた。クラゲには脳

も心臓もない、というのにもびっくり。

「神経と筋肉と消化器官と生殖器官だけのシンプルな生きものです。エサを追いかけて捕まえるなど複雑な動きをする生物は神経中枢で命令を出す脳が必要ですが、クラゲは基本的に水の流れに身を任せ、まわりのプランクトンや稚魚を食べていれば

いい。反射だけで動いている生きものなんです」と、後で足立さんがくわしく教えてくれた。

クラゲファンタジーホールでクラゲに興味をもったら、隣の展示「クラゲサイエンス」で生態を知ることができる。「えのすい」に行けば最大50種類のクラゲに出会う。

クラゲの生態はまだよくわかって



いないことも多く、生理化学的な有効成分も研究されているという。

毒があつて嫌われやすいが、癒される人もまた多い

クラゲの一生は種類によって数週間から数年までまちまち。足立さんによれば、飼育するには「底へ沈まないように水の流れをつくるのと、濾過層から汚水と一緒に吸い込まれないようにすること」が肝心で、なかなかコツがある。クラゲは傘の内側に水を抱き込み、その水をジェット噴射のように押し出すことで推進力を生み出しているのだが、泳ぐ力は弱い。多くは水の流れが止まると、ただぶかぶか浮かんでいるだけか、底に沈んでしまう。

飼育が面倒なので他の魚と違って扱う卸売業者も少なく、採集するか他の水族館から譲り受けることが多い。大きいもので触手の長さが50mにも達するカツオノエボシは採集も飼育も難しい。「南から強い風が吹いてくると海岸に打ち上がるので、いそいそと出かけていきます」と足立さん。ただし打ち上げられて死んでも、触手にある刺胞しほの強力な毒針はしばらく効力があるので、素人は見つけても触らないようくれぐれもご注意を。

「えのすい」では毎月9日、展示飼育スタッフとともに近くの漁港でクラゲを調査・採集する「えのすいクラゲの日」を設けている。季節や天候によっては1時間あまりで10種類ものクラゲを見つけられるという。

クラゲは毒針をもつ「刺胞動物」に属し、イソギンチャクやサンゴの仲間。触手にエサが触れると、刺胞を発射して毒で弱らせ、触手から口腕を伝って真ん中の口、胃腔へとエサを送って消化し、不要なカスをまた口から出す。

つまりクラゲの毒はエサを食べて生きるために必要なものなのだが「刺されると痛くて怖い、気持ち悪い」とクラゲを忌み嫌う人も少なくない。

「水族館で〈好きな生きもの〉のアンケートを取るとイルカやペンギンがトップで、クラゲは人気がありません。ところが〈癒される生きもの〉だと上位にくる」(足立さん)という。

かつて研究者との共同研究では、さまざまな測定やアンケート調査から、クラゲの癒し効果の有効性が示唆された。最近では、〈癒される生き



7 クラゲファンタジーホールで1日に6回上映されるクラゲショー「海月の宇宙」。ホール中央には球形水槽「クラゲプラネット〜海月の惑星〜」が配置されている 8 「バックヤード」にある館内のクラゲ飼育室 9 クラゲファンタジーホールの隣にある「クラゲサイエンス」。知られざるクラゲの生態をよりくわしく学べる



もの)として観賞用「クラゲ飼育セット」も市販されるようになった。動物園と水族館の文化は西洋が発祥だが、ことクラゲの飼育展示に関しては「えのすい」をはじめ日本の水族館が世界の先頭を切り、海外にも影響を及ぼしているという。

生命の源としての水に一番近い生きもの

足立さんは大学で生物の研究をしているときから「よくわからない不思議な海の生きものが好き」だった。その代表選手がクラゲ。「毒があつて怖いとか気持ち悪いという先入観を取り払って、こんな生きものも海にはいるんだ!という気づきの窓口になつてもらいたい」との思いでクラゲの飼育展示に取り組む。

「海月の宇宙」のナレーションで、ハタと膝を打つところがあった。「浮遊するクラゲたちに囲まれていると、ふと時間と空間の感覚があいまいになることがあります。宇宙の塵から地球が生まれ、その地球で生命が誕生しました。クラゲを見てみると不思議な感覚になるのは、命のもとがふわふわと宇宙空間を漂っていたころの、遠い昔の記憶のせいなのかもしれません」

クラゲの身体成分の大半は水。死ぬと溶けて海水に戻る。クラゲは最初の地球で生命が誕生した母なる海の記憶の遺伝子も呼び覚ますようだ。水面に浮かぶ姿を上から見ても癒されないのに、水中で漂う姿は人を癒す。クラゲとは、実に不思議な生きものである。

(2015年8月10日取材)

日本庭園における水への眼差し

— 作庭家・重森千青さんに聞く

日本人にとって海や山、川、野、森など身近な自然の風景を限られた空間で表現する日本庭園。その歴史は飛鳥時代にまで遡る。なかでも、「枯山水」は、「水のないところに水を感じさせる」不思議な様式だ。枯山水を軸にして日本庭園を考えると、日本人にとって水がどのような価値をもっているのか、その精神性が明らかにできるかもしれない。作庭家の重森千青さんに、日本庭園における「水の価値」と「精神性」について伺った。



1 真如堂にある枯山水様式の「随縁の庭」。重森千青さんがデザインしたモダンな庭園。水の気配を感じさせる砂紋は寺務職員が引いている 2 四ツ目結の三井家の家紋があしらわれている仏堂の臺股 3 よくよく見ると、水の流れを考えて仏堂側が高く、手前を低く設計しているのがわかる



重森 千青 さん

しげもり ちさを

作庭家／重森庭園設計研究室 代表

祖父である重森三玲（みれい）、父の完途（かんと）に続く三代目。日本庭園についての著述、講演、講師活動および庭園の設計に携わる。1991年（平成3）、ロンドンを中心に開かれたジャパンフェスティバルの事業「ロンドン京都庭園」の作庭派遣団の一員として、ロンドン市内で日本庭園の作庭に従事。2001年（平成13）4月から、京都工芸繊維大学工学部造形工学科で「庭園美学論」の非常勤講師も務めている。

水を使わずに水を感じさせる枯山水

京都洛東に真如堂（しんじゆどう 鈴聲山「れいしやうざん」真正極楽寺）という天台宗の寺院がある。書院から仏堂を望む「随縁の庭」は枯山水様式のモダンな庭園で、2010年（平成22）、作庭家の重森千青さんがデザインした。真如堂は三井家の菩提寺。仏堂の臺股（注1）には四ツ目結の三井家の家紋があしらわれている。そこで重森さんは家紋をモチーフに取り入れ、形も色も「四」を軸にした枯山

水を作庭した。配した樹木もマキ、ヒノキ、サツキ、オトコヨウゾメと4種類。縁石や玉砂利の仕切り石に至るまで、寺にひっそり埋もれていた石や木を使っている。鬱蒼とした仏堂前の坪庭が明るくなって檀家の三井家は喜び、元からの材料を活かした枯山水に寺としても愛着が深まった。

砂の紋様が波を表す「砂紋」。水のないところに水を感じさせる枯山水ならではの表現だ。それを寺務職員が独自に工夫して引いている。「日々見て感じ、手入れする方々の

（注1）臺股

和様建築で梁や頭貫（かしらぬぎ）上にあって上の荷重を支える材。



3

「おかげで庭は生き生きと育ちます」と、作庭家冥利に尽きる重森さんと、精神性と経済性が合致した知恵の産物

日本庭園は、水の動き、そして石や樹木、草花、苔によって自然を再現するものだ。身近な空間に自然を表すことによって「安寧を得たい」という精神性がある。その根幹には「自然の美しさに思いを馳せてつく」という心構えがある。重森さんは「美しい場所を見ると、真似してつくろうと考えますが、大自然そのまま凝縮しても無理がある。ですからその美しさに思いを馳せつつ、狭い空間でどう表現するかを試行錯誤するので」と語る。

枯山水の庭園は、室町時代後期に禅寺を中心に多く出現した。それまでは滝や池、遣水（注2）などには水を使う池泉庭園が主流だった。枯山水は、あたかも表面に水が流れているような白い石英（注3）混じりの白川砂を使ったりして、水の流れを見立てる。座禅し精神統一していると、水でないものにも水を感じられるようになる。禅の精神性と結びついた庭園様式だったのだ。

しかし「実のところ枯山水はもつと時代を遡ります」と重森さんが歴史を紐解いてくれた。「平安時代末期にまとめられた日本最古の作庭書『作庭記』に（池もなく遣水もなき所に、石をたつる事あり。これを枯山水となづく）とあるのです」。

平安時代から残る毛越寺庭園（岩手県平泉町）。池へ張り出した築山の上部に多数の石で組まれた箇所がある。まさに滝などの自然風景に見立てた『作庭記』風の枯山水だ。

苔寺の愛称で有名な京都の西芳寺庭園にも、石組の配置だけで豊かな水量を感じさせる「枯滝石組」の一角がある。『作庭記』でいう池から離れ独立した枯山水にほかならない。

ではなぜ室町時代後期に、現代の私たちが枯山水と聞けば思い浮かべる、砂と石だけで構成した庭園が突如として続出したのだろうか。

「京都の3分の2が焼失したといわれる応仁の乱が原因です」と重森さんは解き明かす。「池泉庭園を復興するのは大変な作業です。今のように入電ポンプなどないので、川や湧き水から水を引いてくるのは大工事。しかも、すべての箇所レベルを合わせなければ水は澱んでしまいます。澱む＝不浄ですから、水を扱う庭園

（注3）石英

二酸化ケイ素からなる鉱物。六角柱状または錐状の結晶。無色もしくは白色でガラス光沢がある。

（注2）遣水

庭園などに水を導き入れ、流れるようにしたもの。水の流れを変え、横石の配置などさまざまな工夫が凝らされた。



上空から見た桂離宮。池のまわりに書院や茶亭を配している。庭と建築の構成が見事で、その回遊式池泉庭園は日本庭園の美の集大成ともいわれる。敷地は約6万9400㎡ 写真：首藤光一/アフロ

で絶対にやってはいけません。池の水があふれないようにしかるべきところ水を流す排水設備も必要です。防水加工もコンクリートがないから粘土打ちです。私は古い池泉庭園の修復を経験しましたが、粘土を玉にして打ち付けていくので跳ね返ってドロドロになり、猛暑の夏にカッパを着て地獄のような重労働でした。当時、どうすればお金と労力をかけずに庭園を復興できるか、と考えて行き着いたのが、庭園すべてを枯山水にするアイディアだったわけです」

水のないところに水を感じる禅の精神性。池泉庭園よりも簡便につくれる経済性。枯山水は二つを巧妙に合致させた知恵の産物といえよう。

疲れ切ったニューヨーカーが滝の前でポーツと過ごす

洛北の禅寺で茶の湯の聖地として知られる大徳寺。そのなかの塔頭である大仙院庭園は、龍安寺庭園と並んで枯山水の代表的な庭園である。その構成は、水墨画のような山岳風景に枯滝、枯流を備え、大自然の水景が表現されている。

「日本庭園は池泉・枯山水・路地の三つに大別されますが、いずれもキ

ーワードは水。水がないと始まりません。近ごろ西洋庭園で流行している、雨水を有効利用し川の流れのように見えるレインガーデンの趣向も、日本庭園にはとっくの昔からありました。雨が多く水が豊富にある恩恵を慈しみ、水のを引き出すことが、日本庭園に脈々と流れる重要な伝統です」と重森さんは話す。

水の音色も日本庭園では大切な要素。夏の暑さを少しでも和らげようと、手水鉢の柄杓を取って手を洗ったときコロコロと涼やかな水の反響音がする水琴窟(注4)は、茶人の繊細な気配りによって生まれた工夫だ。

回遊式池泉庭園を代表する桂離宮庭園に「鼓の滝」という見逃すほどの小さな滝がある。そばに橋がかかっており、名前のとおり、鼓のようにあでやかな音がするので「橋を渡るのが楽しみ」(重森さん)という。

ところが、このように水の音を巧みに扱うのは日本人だけではない。重森さんが一例として挙げたのは、ニューヨークのペイリーパーク。公園の奥にある6mの落差の滝は、日本庭園の滝にヒントを得て設計されたものだ。

訪れた重森さんによれば「間近に





右:大徳寺の大仙院庭園。水墨画を立体化したような山水風景が特徴。重森さんいわく「枯山水の美に深く接したいのならば、まずは龍安寺庭園と大仙院庭園を拝見しなければいけません」

写真: 山本健三/アフロ

左: ニューヨーク・ペイリーパークの滝のそばでくつろぐ人々。設計者はアメリカ人だが、日本庭園の滝からヒントを得たという

写真: Alamy/アフロ

行くと都市の雑踏音がすべてかき消され、落水の音しかしません。疲れ切ったニューヨークカーたちが滝の前に陣取ってポーツとしていました。都市生活で溜まった澱^{おり}を、滝の落水と水音が洗い流してくれる。水のもつ清らかさや落水が奏でる音は、人間にとって絶対的に必要なものだと重森さんは言う。「中国は池泉庭園が中心ですし、さらに西へ向かってもどの国の庭園にも水がある。インドのタージ・マハルもそうですね。暑い国ならば水を大量に扱うことで己の権力を誇示する意味もあります。が、清々しい空間にするにはどうしても水が必要だったのです」。庭園の水は古今東西を問わず、荒んだ心に染み込み、活力を呼び戻すようだ。

四季折々の色づきと庭園の構成を楽しむ

日本庭園のよさを味わうにはどんな見方をすればよいのだろうか。「花咲く春、新緑の夏、紅葉の秋に出かけて(ああきれいだな)で最初はいいと思うのです。季節ごとの草木の色づきを堪能したら、今度は庭園全体の構成に目を向けてみる」
例えば海外にも名高い龍安寺の石

庭。きわめてシンプルな構成の枯山水だが、五つのブロックの石が巧みな遠近法を司り視線を誘導する。

また池泉庭園では自然の山並を石で表す。山並なら築山で十分なのに、その上へさらに石を据えるのは、陰しくそびえ立つ山を表現している。「そこまで気づけば、人がたどりつけない深山^{しんさん}幽谷^{ゆうこ}すなわち不老不死の仙人がいる蓬萊山^{ほうらいざん}を表していることがわかります。理想郷としての蓬萊神仙思想を表す寺院庭園は多い」
この思想には長寿の象徴である鶴と亀の石組や島を設ける。そのような象徴を見つけ出すのも楽しみ方の一つ、と重森さんは言う。

お気に入りの庭へ足繁く何度も通う

天候や時間帯で光線の具合が異なり、庭は時々刻々と風情を変える。「お気に入りの庭ができた足繁く何度も通うと、そのたびに発見があるはず」と重森さんは強調する。
著名な作庭家・庭園研究家である重森三玲^{みれい}を祖父にもつ重森家は代々作庭に携わる。父親からよく「美しい景色は真冬にわかる」と言われたという。落葉し、花も咲かず、何も



真如堂にはもう一つ枯山水の庭園がある。比叡山など東山三十六峰を借景とした「涅槃の庭」

右: 龍安寺の庭園。敷き詰めた白砂は大海で、点在する石は海に浮かぶ島のように見える。石の大きさと配置の妙で、奥行きのある美しい空間となっている 写真提供: 龍安寺

ない景色。風は冷たく、京都の冬は身を切るように寒い。そんな(すっぴん)の状況でも美しい景色なら、春や秋は当然美しいのである。
「これは庭園も同じで、落葉樹の枝先に至るまで、冬のピンと張り詰めた空気と繊細な枝ぶりの景色は最高です」
重森さんは「そこまで行ったら、いったん自分の知識をすべてリセットし、頭を空っぽにして庭に向き合ってみてほしい」と最後に付言した。
空っぽにして見えてくるものは何だろうか。それはやはり、どの様式の日本庭園にも共通する水のイメージかもしれない。

(2015年7月31日取材)

(注4) 水琴窟

水音を楽しむため、庭園に仕掛けられた装置。手水鉢の排水口の下に、小さな穴を底に開けた水瓶などを伏せて埋め、その中にたまった水に滴が落ちて、琴のような音が聞こえる。

Scene2 水による心の回復力

感性を刺激する「滝時間」

——心と体をリセットして、生きる力を取り戻す

滝マニアとしてこれまでに400カ所以上の滝を巡り、滝の魅力を伝えるサイトの運営や、滝ツアーも主催する坂崎絢子さん。滝マニアならぬ「滝ガール」の坂崎さんは「滝は安らぎだけでなく、明日へのパワーも与えてくれる存在」と言う。編集部も滝のエネルギーを体感すべく、坂崎さんの指導のもと滝巡りに出かけた。

緑浦・ツルギ
子 庄
100m

滝壺に落ちたことで 目覚めた滝の魅力

連日30℃超えの夏だったただなか、「滝ガール」こと坂崎絢子さんの案内で、「神戸岩」「天狗滝」「払沢の滝」という、東京・檜原村の三つの滝を巡った。滝のそばは別世界の涼しさで、靴を脱いで水に入ると全身がクールダウンし、暑さも吹き飛んだ。

この日案内してくれた坂崎さんは、10年以上前から滝がもつ「安らぎ」のポテンシャルに注目し、今では滝の魅力を広める活動をする数少ない滝マニアだ。東京で生まれ育った坂崎さんは、それまで自然とふれあう機会が少なかった。学生時代、青森県の奥入瀬で滝の神秘に魅了されたことが、滝を意識した最初のきっかけ。その後、旅先の長崎県で立ち寄った滝で、うっかり足を滑らせ滝壺に転落するハプニングが坂崎さんの「滝愛」を完成させた。

「想像以上にいい滝で、興奮して足を滑らせて腰まで水に浸かってしまったんです。でも、怖いというより気持ちよくて、笑いが止まらなくなりました。水の温度を肌で感じたことで滝をより深く知ることができた気がして、それ以来、滝にハマって

しまいました」

以来、全国の滝を巡っているが、滝マニアのなかでも坂崎さんがユニークなのは滝での過ごし方だ。滝のそばでコーヒーを淹れて飲んだり、誰もいなければ昼寝をしたり、大声で歌ったり、と主にリラクソスのための「滝時間」を過ごすという。しばらくは個人的に訪れるだけだったが、一人で楽しむだけでなく、滝の魅力を多くの人に知ってほしいと考え、2013年（平成25）に滝の情報サイト「Takigirl -Waterfall & Peace-」を立ち上げた。

滝を深く知ってほしい。 初心者のための滝ツアー

現在、坂崎さんは「滝ガール会」なるツアーを主催している。東京や近郊エリアでタイプの異なるおすすめめの滝をいくつか案内しながら、滝を深く味わうための鑑賞方法もアドバイスする（下）。参加者は20〜40代のインドア派の女性を中心に、リピーターも多い。

「アクティブな女性はトレッキングやキャンプを求めますが、滝巡りならば重装備は不要です。自然のなかでリフレッシュしたいと思ったとき

坂崎絢子さんによる 「滝を鑑賞するときのヒント」

〈見る〉

- ・落ちる水の一粒を上から追いかけてみよう
- ・いろいろな角度から見てみよう
- ・流れのなかで気に入った部分を写真で切り取ってみよう

〈聴く〉

- ・耳に手を当てて音をよく聞いてみる
- ・滝の音を擬音化してみよう
- ・滝の音のほかに聞こえる音は？

〈想像する〉

- ・その滝を「人」にたとえるなら、どんな人？
- ・昔の人は、どんなふうに滝を見ていたのか？
- ・この滝の水はどこから来て、どこへ行く？
- ・時間が変わったら、季節が変わったら、この滝はどうなる？

坂崎 絢子 さん さかざき あやこ 滝ガール

東京都生まれ。大学生のころから10年以上、日本全国の滝巡りを続ける。卒業後は出版社でライター・編集者として働く傍ら、週末は「滝ガール」として活動。ウェブサイトや雑誌で情報発信するほか、都会で暮らす女子向けに、滝ツアーや滝yogaイベントなども開催。2015年8月末で出版社を退社。新たなフィールドを求めて活動をスタートした。



払沢の滝まではJR武蔵五日市駅から西東京バスを利用して約25分。「払沢の滝入口」バス停で下車し、徒歩で約15分。バスは本数が少ないので要注意

国土地理院基盤地図情報「東京都」及び、国土交通省国土数値情報「河川データ（平成20年）」より編集部で作図。この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の基盤地図情報を使用した。（承認番号 平27情使、第514号）

右：岩肌をまるで滑るように水が流れ落ちる、落差38mの天狗滝。お弁当を広げ、のんびりくつろいでいるグループもいる



1 東京都の天然記念物にも指定されている「神戸岩」。長さ60mの峡谷で、小規模な滝が連続している。鎖場などもあり冒険気分を味わえる
 2・3 昼食をとった「ヴィッラ・デルピーノ」。檜原村の地野菜を使ったイタリア家庭料理は美味
 4 「天狗滝」に向かう山道。多少険しい箇所もあるが、30分ほど歩くと天然クーラーの別世界に



に「これなら私でも行けるかも」と思える手軽さが、比較的インドアな女性の興味を引くのでしょうか」
 実際に駐車場から少し森のなかを歩けば、迫力ある滝に出会えた。さらに、このツアーには女性のアーテナを刺激するポイントがもう一つある。地元のレストランでのランチや滝前でのヨガ、温泉に立ち寄るなど、滝を見るだけでは終わらない「滝+〇〇」の要素が必ず用意されている。この日、坂崎さんが昼食場所として選んだのは、檜原村の地野菜を使ったイタリア家庭料理が味わえる「ヴィッラ・デルピーノ」。山々のパノラマを見渡しながら味わう本格的なイタリアンが、滝巡りをいっそう楽しいものにしてくれた。こうした二本立ての楽しみもまた、リピーターが多い理由なのだろう。

滝は感性を刺激し 五感を開いてくれる

ツアーで実際に滝を見て「心が休まった」などの感想をもつ女性は多いそうだが、その効果を十分に受け取るにはどうすればいいのか。「安らぎ」に適した滝の条件を聞いた。

「まず日当たりがよく、滝の前にゆ

ったりくつろげるスペースがあることです。私は観光地化されすぎでない滝の方が好みですね。さらに落差が20m以上あると感動が大きいですし、水量の多い滝ならしぶきを浴びることもできます」

また、滝を鑑賞する際に重視するのが「滞在時間」と「自分なりの感動ポイントを見つけること」。滝には、最低でも30分は滞在してほしいと坂崎さんは言う。

「写真を撮って終わりではなく、せっかくなら滝のもつ個性を感じてほしいです。苔や岩の感じや滝の音、流れのなかで好きな部分を探すなど、自分なりの感動ポイントを探してください。思いを巡らせるうちにアンテナが立ちはじめ、滝の細かな変化がわかったり、自分の感覚が研ぎ澄まされることに気づくはずですよ」

これを「五感が開かれる感覚」と坂崎さんは表現する。さっそく両耳に手をあてて滝の音を澄ませるといふ、坂崎さんおすすめのお楽しみ方を実践してみる。すると、それまで聞こえていた鳥のさえずりやセミの声が一瞬にして遠のき、滝の音だけがくっきりと聞こえた。

「滝の発するマイナスイオンが浄化作用を促すなどとてもいいわれますが、



5 両耳に手を添えて、滝と反対側を向く。坂崎さんおすすめの水の楽しみ方

6 清冽な滝壺の水をすくう。滝の楽しみ方はさまざま

7 日本の滝百選にも選ばれている「払沢の滝」。深い滝壺には大蛇が棲んでいたとの伝説がある。坂崎さんは滝をきれいに撮りたくてデジタル一眼レフカメラを購入した



少しざっくりしていますよね。目で

見て感動ポイントを探す、滝の音に

耳を傾ける、足で冷たさを感じてみ

るなど、能動的に自分の感性に働き

かけることで、安らぎを実感してほ

しいと私は思っています」

しばらく耳に手をあてて滝の音を

聞いていると、心と体が自然のリズ

ムに溶け込んでいくような、心地よ

くも不思議な感覚になった。

**なぜ、滝を見ると
元気になるのか**

坂崎さんは、滝ガール会の参加者

から印象的な感想を聞いたことがあ

る。普段の旅行では「明日から会社

か…」と憂鬱になるのに、滝を見た

後はやる気に満ちていて、「早く仕事
がしたい！」と言っていたそうだ。
「滝の前では、ゆったりと心安らぐ
感覚はもちろんありますが、エネル
ギーをもらい活力がみなぎる感覚も
たしかにあります。例えば、ドドド
ドと勢いよく流れる滝の前では、喝
を入れてもらっているような」
滝の何がそのような感覚を呼び起
こすのだろう。
水には、雨が降って川になり、途
中に滝や湖があり、海に流れて雲に

なるという一連の物語（サイクル）が

ある。そのなかでも、水が落下する

滝は、水自身もつともエネルギー

を発する瞬間だ。歌でいう「サビ」

の部分だと坂崎さんは考えている。

「滝に近づくほどに元気になる感覚

はあります。人間の体の7割が水と

考えると、もつともエネルギーシ

ュな状態の水に触れるので、そのパワ

ーをもらえるのかもしれない」

動きや音があり、水の個性が際立

つ滝は芸術的ともいえる。「滝の前で

は不思議と一人で過ごす方が多く、

皆さんそれぞれに目のつけどころが

違つて本当に興味深いです。滝を深

く知ること、自然や歴史のことを
考えるきっかけになったり、自分自
身がすっきりすることで悩みが和ら
いだり、滝をツールに、何か新しい
発見につなげてもらえるとうれしい
です」と坂崎さんは話してくれた。
最後に訪れた「払沢の滝」では、
ゴーゴーと水音をあげる滝の前に30
分ほど滞在したが、何時間でもいら
れる気がした。心と体をリセットし
たい、最近自然に触れていないと思
う人は、ぜひ滝のパワーを感じに出
かけてみてほしい。「滝時間」が思わ
ぬ発見をもたらすかもしれない。
(2015年8月4日取材)

Scene3 水による心の回復力

「御舟かもめ」クルーズに見る 〈都市の川面〉の魅力

大阪の水辺の新しい活用事例として注目される「御舟おふねかもめ」。乗客10人ほどの小舟で大阪の河川を巡り、着実にファンを増やしている。乗り合わせた人たちは互いに写真を撮り合い、食べ物を分け合うといった交流が日常的に生まれているという。実際に編集部は「御舟かもめ」に乗ってみた。すると、水面とほぼ変わらない低い目線からは、〈都市の川面〉の魅力が見えてきた。



1 「御舟かもめ」のオーナー・船長の中野弘巳さん。運航中も絶えず見どころを教えてください 2 「朝ごはんクルーズ」で提供された朝食セット。食材にこだわり、メニューはそのときどきで見直す





3 「朝ごはんクルーズ」で乗り合わせた大学生カップル。決して大きくはない舟、そして床に座るといふ「御舟かもめ」特有のスタイルを楽しんでいた

川面から見る景色で 大阪が好きになった

天満橋駅そばの八軒家浜船着場から定員10名の小さな舟に乗り、旧淀川へ。中之島や道頓堀を川面から眺める「御舟かもめ」クルーズだ。

橋をくぐり抜け、ビルの陰から顔を覗かせる大阪城を望み、川の上を走る高速道路の橋梁を仰ぎ見る。ボラが跳ね、鵜が魚をくわえていた。

川面からは都市の知らない顔が見える。年2回は「御舟かもめ」に乗るといふ大阪市内で働く木村久美子さんは「風や揺れ、匂いや水しぶき、かもめさんにベタッと座れば体全体で川を感じられます。いつもは何と



も思わない景色が、川面から見るとなんてカッコいい！と目からウロコ。大阪が好きになるきっかけでした」と話す。

乗り合いクルーズのプログラムは4種類。全制覇した木村さんによれば、初めて遠来の客を誘うなら夜の「パーククルーズ」、二度目には「朝ごはんクルーズ」、友人と気軽になら「カフェクルーズ」、一人だと川幅も景色もどんどん変わる巨大構造物鑑賞の「ドボククルーズ」がおすすめ。

曜日を問わず運航の貸切クルーズは誕生日会、句会、写真教室などに利用される。結婚前の両家の顔合わせにも「オーナー・船長の中野弘巳（ひろみ）さん」使われた。移りゆく珍しい

景色に話題は事欠かず、初対面の気詰まりも川面を渡る風に吹き流される。

新規就航における 参入事情

屋形船や大型遊覧船にはない小舟のよさは、水に近いことと目線の高さが水面とあまり変わらないこと。

編集部が乗船したのは30℃を超える真夏日だったが、川風が頬をなでると体感温度は下がる。出航時は日除け窓のキャンビンにいたカップルも、しばらくすると、より水に近いウツドデッキに出て川を楽しんだ。二人は東京の大学生で、女性は高校まで

は大阪育ち。「大阪の街がこんなふうに見えるなんて！」と驚きを隠さなかった。「今日はどちらから？」「東京からです。取材中なんですよ」と和やかに話が弾む。まさに「同じ舟に乗り合わせた者同士」。これもまた小舟ならではの醍醐味だ。

12名以下の定員の小型船なら、海上交通法では「内航不定期航路事業者」の届出だけで営業できる。船舶免許は4〜5日あれば取れる。だが、川は慣習や慣例が幅を利かす世界。新規就航の小型船は肩身が狭い。停泊場所もままならず、暗黙のルールを知らない厄介者扱いされる。「法律上の規定に限れば始めやすい商売ですが、見えない障壁が全国共

八軒家浜船着場の前でUターンする「御舟かもめ」



道頓堀をゆっくり進む。地上から見ると水面からの光景はかなり違う

しかし、NHKディレクターという安定した職を捨ててまでこの道を選んだだけに、川への思いは強い。

「浮かぶだけで楽しいから川へ出てみませんか」

三重県桑名市に生まれ、木曾三川の輪中（注）地帯で子どものころから川に親しんでいた中野さんは初任地の大阪でも寝屋川沿いに居を構えた。たまたま同じマンションに、学生時代から知っていたNPO法人「水辺のまち再生プロジェクト」のメンバーで、建築設計事務所で働く傍ら金曜日の夜だけ4人乗りの小さな水上タクシーを操縦する吉崎かおりさんが住んでいた。2人は2007年（平成19）に結婚する。

通にあると思います。船着場の運用ルール一つとっても定期就航の大型船が中心です」と中野さん。スケールメリットがないので採算面でも厳しい。小型船で営業となると、高価に設定した貸切クルーズに特化する業者が多く、「御舟かもめ」のように値頃（大人2100円〜4200円）な乗り合いクルーズを続けるのは、なかなか大変だ。「いつまで道楽してるんだ、と実家から言われてます」と中野さんは苦笑する。

ことを考えて」2009年に職を辞し開業。船の業界事情をよく知る妻も「愚痴をこぼしながら働くよりも好きなことをしたほうがいい」と背中を押した。

退職金と貯蓄を元手に、熊本で真珠養殖に使っていた船を「外車一台分くらい」の投資で入手改造した。

始めた当初、客足はさっぱり伸びず、勝手もわからず、他の船からよく叱られていたが、1年も経つと顔なじみになり「にいちちゃん、こうやで」と助言をもらえるようになった。

ようやく軌道に乗ってきたのはここ2〜3年。昨年は初年度の倍以上の3300人が乗船した。スタッフは夫婦2人と、ピンポイントリリーフで船長を務める3人の計5人。手元に資金が残らず「まだ2隻目まで手が回らない状況。あと1000人は乗船客を増やしたい」と話す。

ボートやカヌー、釣りなど、アウトドアスポーツを趣味とする人のためにだけに川はあるのではない。中野さんの口からそんな言葉も聞けた。

ぶかぶか浮かんでいるだけで気持ちいいから、試しに川へ出てみませんか。そうした誘いに共感する来客が多そうな個人店舗を選んでパンフレットを置いてもらうなど、PRに



堂島川に架かる1929年（昭和4）竣工の「水晶橋」。こうした構造物を巡るのも楽しみの一つ

も地道な工夫を重ねている。

折り畳み自転車を持って来る人も。「愛車もかもめに乗せてやりたい」のどとか。観光遊覧とは少し違う、ふらつと散歩のついでや、ピクニックの一行程として舟に乗り川に行く。そんな楽しみ方があっていい。

御舟かもめリピーターの木村さんは川面の魅力を「都会の隙間で旅行気分になれるところ」と話す。せわしない日々を、ほんのひととき忘れさせてくれる、都市にぽっかり開いた異界。そこから街の知らなかった顔が見える御舟かもめ。家庭的な雰囲気豊かな旅行気分まで味わえることのような取り組みが全国に広がると、水辺とのつき合い方も豊かになるにちがいない。

（2015年7月31日〜8月1日取材）

（注）輪中

集落や耕地を洪水から守るため、周囲を堤防で囲んだ地域。また、それを守るための水防共同体を有する村落組織を指す。木曾川・長良川・揖斐川の下流域のものが有名だが、水害が減って必要性が低くなり、また道路の新設などによって今はあまり残っていない。

「水」を活かしたリゾート戦略

——しこつ湖鶴雅リゾートスパ水の調の「競争しない個性」

北の大地に「水」を前面に打ち出したリゾートホテルがある。支笏湖しこつこの畔ほとりに建つ「しこつ湖鶴雅リゾートスパ水の調」だ。夏期はほぼ満員の状態が続くという。「水」をどのように活用しているのか、そして「水空間」をいかに設計しているのか。宿泊客をもてなすホスピタリティも含めて伺った。

ウェルカムラウンジと客室ラウンジをつなぐ通路にある水の回廊「調の道」。ライトアップによって幻想的な水空間が表現されている

静謐な雰囲気の中か、「水琴窟」がお出迎え

北海道の空の玄関口・新千歳空港から車でおよそ40分。木立のなかを抜けるとレストランや土産物販売店、観光客用の広い駐車場などの一角に出る。「しこつ湖鶴雅リゾートスパ水の譚」（以下、水の譚）は、その裏手の森のなかにひっそりと建っていた。

玄関に車を止めると、出迎えたスタッフにキーを預けて宿泊客はそのまま館内へ。車はスタッフが駐車場まで運び、出発時も玄関まで回送する、国内では珍しい「バレーサービ

ス」だ。その名を体现するがごとく、玄関からウエルカムラウンジを囲むように水路が配されている。ウエルカムラウンジの中央には、支笏湖を生み出した恵庭岳や風不死岳などの火山をモチーフにした水琴窟がある。

ウエルカムラウンジと客室ラウンジをつなぐ通路沿いにも、ゆるやかな曲線を描く水の回廊「譚の道」が設けられている。支笏湖から流れ出る千歳川をイメージしたもので、歩いて客室ラウンジへ向かうと「コロコロコロ……」という優しい音色が聴こえる。水琴窟の奏でる音をマイ

クで拾って、スピーカーを通じて流しているのだ。

このように、水の譚は「水」に焦点を絞ったリゾートホテルである。

競争しないために個性を備える

道東を中心にリゾートホテルやレストランなどを手がける鶴雅グループは今年、創業60周年を迎えた。温泉旅館として開業したときまで遡ると、その歴史は100年に及ぶ。今、グループを率いる大西雅之氏（株式会社阿寒ランドホテル代表取締役社長）は1989年（平成元）に父・正昭氏から引き継いだ。その2年前から大手旅行代理店から「送客停止」の通告を受ける危機的な状況にあったものの、団体周遊型観光から個人滞在型観光への切り替えを進め、苦境を乗り越えた人物として知られる。

水の譚は、2008年（平成20）に支笏湖観光ホテルを買収・改修して翌年5月にオープンした。岡田正巳副支配人によると、大西氏は以前から摩周湖やバイカル湖にも匹敵する透明度の支笏湖に関心を抱いていたそうだ。

「大西は『ホテル旅館業の最大の使

命はお客さまの癒しだ』と考えています。そして、『人間の体の70%は水である』と常々『水の大切さ』を従業員に説いています」

水の譚の空間設計・デザインを外部に発注する際、大西氏は「水をイメージしてほしい」と要望。「水の癒し力」をテーマとする今のスタイルになった。

鶴雅グループは、ほかにも「森を歩く、森を感じる」をテーマとする「定山溪鶴雅リゾートスパ 森の譚」を2010年（平成22）8月に開業。来年は庭園造景を前面に打ち出したホテルもオープンする。

こうした独自性をもたせる背景には、経営理念の一つに掲げる「競争しない個性をもつこと」がある。

「水」を軸とする五感への働きかけ

では、水の譚では「水の癒し力」を個性とするために何を設計しているのか。視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚の五感で見るとわかりやすい。

視覚は先に述べた水の回廊だろう。水琴窟は言うまでもなく聴覚に訴えるもの。触覚は、中庭に設けた足湯が挙げられる。足湯は、宿泊客だけ



3



2



1

- 1 ウエルカムラウンジにある水琴窟。奏でる音は客室ラウンジに向かう通路で聴ける
- 2 しこつ湖鶴雅リゾートスパ 水の譚の副支配人を務める岡田正巳さん。大手ホテルチェーンで勤務していた経験も活かして陣頭指揮をとる
- 3 中庭にある足湯「草々（そうそう）の湯」で楽しそうに語らっていた女性たち。もとは職場の同僚で、久しぶりに集まったそう



5

4 硬水、軟水、スーパーキングウォーターなど約30種類のミネラルウォーターを販売するアクアバー

5 中央に高さ約7mの暖炉を備えた客室ラウンジ「アベソ」。アベソとはアイヌ語で囲炉裏の意味。エゾシカの皮を用いたクッションの上で本を読むなどくつろげる



でなく、日帰り・デイユースプランの利用客も気軽に楽しめる。

味覚は、約30種類のミネラルウォーターが楽しめるアクアバーだ。アクアバーは約30種類の枕を貸し出すピロギヤラリーと併設している。それは眠る前、そして目覚めるとき、水を飲むことで体内から健康になってもらおうという意図がある。岡田氏は「国内はもちろんのこと、イタリアやフランスなどの海外からも仕入れて展示・販売しています」と明かす。

嗅覚は、ウエルカムラウンジ周辺ではのかに漂う水の匂い。このように、五感から「水の癒し力」を設計しているのがわかる。

また、水の譚はホテルとしては珍

しい「素足で過ごす」スタイル。もともと外国人観光客に日本文化を体験してほしいとのコンセプトだったが、日本人にも好評だ。「自宅にいるようなくつろぎを」（岡田氏）の思いからオリジナルの作務衣も用意。宿泊客のおよそ9割が作務衣で散策する。靴を脱いで素足で歩き、体を締めつけない衣をまとう。そうした仕掛けからのリラククス空間を提供している。

一方、鶴雅グループ全体としてホスピタリティで気を配っているのは「痒いところ」に手が届く接客。

「例えばチェックインの際に、開催中のお祭りやイベント、見どころなど、地域の情報をお伝えするといった気遣いですね」と岡田氏。さらに、居住地や家族構成、来訪の目的など宿泊客の情報を詳しく記した名簿を毎日つくり、前日の夕方には全従業員に配布している。名簿作成の専属者がいるほどの徹底ぶりだ。

大自然のなかで 引き出されるもの

支笏湖は国立公園にあり、勝手に木を伐ることができない。そのため、部屋から湖面は見えないが、ほんの

少し歩けば畔に出られる。宿泊客は日中、主にゴルフとアウトドアスポーツを楽しむので、水の譚は季刊広報紙『Mizu no Uta PRESS』を発行し、アクティビティへの誘導も行う。カヌーや釣りはもちろん、支笏湖は透明度が高いため淡水湖にもかかわらずダイビングやシュノーケリングが楽しめる。館内はもちろんのこと、滞在中のアクティビティまで一貫して楽しんでもらおうとするのが水の譚のリゾート戦略なのだ。

編集部は、夜のライトアップを待つ間、夕闇迫る湖畔に出た。カヌーを借りて湖水に漕ぎ出す。一人で浮かんでいると、空と大地の広さを感じる。自分が水に溶けていくような感覚すらあった。

最大の使命を「お客さまの癒し」と捉え、そのために人体のおよそ7割を占める水を活かしたリゾート戦略。空港から40分という地の利。支笏湖と山々が織りなす美しいロケーション。宿泊客の要望を汲みとるホスピタリティ。五感を刺激する館内の設計。そして、一歩外に出ると、夢中になるさまざまなアクティビティがある。これらが一体となったのが、水の譚の「水の癒し力」だった。

(2015年8月20日取材)

人と人をつなぐ健康ランド

——風呂をインフラとする「サードプレイス」

愛知県名古屋市の郊外にある「平針東海健康センター」では、フラダンスやカラオケ、卓球などの同好会が核となったコミュニティがたくさんつくられている。なぜ健康ランドで人と人がつながるのか。それは風呂という水空間を備えていることが大きい。「風呂は人が集まるためのインフラ」と考え、同好会活動を推進する健康ランドを訪ねた。

都市生活者に必要な居心地のよい第三の場

「サードプレイス」という言葉をご存じだろうか。これはアメリカの都市社会学者、レイ・オルデンバーグが1989年（平成元）に著した『The Great Good Place』で提唱したものだ。

都市で暮らす人々には三つの居場所が必要であり、ファーストプレイス（第一の場）が家、セカンドプレイス（第二の場）が職場や学校、そしてそのどちらでもない第三の場がサードプレイスである。個人が家庭や職場・学校で果たす役割から自身を解き放ち、くつろぐことができるうえ、新たな出会いや良好な人間関係を提供する場であるとしている。概説

（p8）で上田紀行さんが述べた、生きる喜びを感じられるもう一つの世界をもつ（複線化）にも通じる。

今回訪れた「平針東海健康センター」（以下、東海健康センター）では、利用者が同好会活動でつながり、家や職場では話にくいことも相談して活力を得ていた。まさにサードプレイスだ。しかし、同好会の活動場所はどこでもいいはず。風呂という水空間を備える健康ランドだからこそ、活力が得られる理由がある。

リニューアルを機に同好会活動を強化

まずは東海健康センターの成り立ちから見ていこう。株式会社TKC

が運営する東海健康センターは、1984年（昭和59）12月に健康ランドとしてオープンした。金原光浩社長の父で、重機のリース・修理業を営んでいた先代が4000坪という広大な敷地に建てた。約10年前から入

泉料を払えば大衆演劇や歌謡ショーを無料で見ることができるようになり、近隣住民はもちろん、劇団を追って遠方からも人が押しかける。

金原さんによると、24時間営業の健康ランドは最盛期には全国で200軒以上あったが、今は120軒ほど。「お風呂をからませて広間で芝居を観ていただくなど、半日から一日ゆっくり楽しんでもらうのが健康ランド」（金原さん）で、より入浴に特化した公衆浴場は「スーパー銭湯」と





リニューアルに伴って新設した「露天風呂」。溜池を借景に開放的な気分が味わえる



従来にも増して同好会に力を入れたいと考える金原光浩さん。自身のアイデアから新設した檜の露天風呂で。右は受付カウンターそばの目立つところにある同好会催しの案内板



右：フラダンス同好会「藤ブアナニ フラレアリア」のメンバーたち。土田ユリ子さん(右端)の指導を受けて真剣な表情で踊る

呼ばれる。健康ランドに比べて小規模で料金が安く、滞在時間はより短い傾向がある。

東海健康センターの興味深いところは、同好会の活動を後押ししていること。同好会に対して10年以上前から館内のスペースを提供し、講師を招くなどの支援を続けている。その甲斐あって、囲碁、将棋、歌謡舞踊、フラダンス、卓球、カラオケ、健康おどり、TKCキッズダンスと、

今は8つの同好会が活動中だ。

東海健康センターは今年4月にリニューアルしたが、それに先立って金原さんは各地の健康ランドやスパ・銭湯を視察。「同好会は自分たちの特色なのだ」と改めて実感する。「囲碁や将棋はあるけれど、フラダンスなど教える人が必要な同好会はよそにはなかったです」と言う金原さんは、リニューアルを機に同好会の充実に取り出し、3人そろえば同

好会として発足させる「小さく生んで大きく育てる」戦略に舵を切った。金原さんの声かけて年内には芝居の同好会が立ち上がる予定だ。

「大手を振って遊べるこの日が待ち遠しい」

火曜日の午前10時半。2階の多目的ルームには、カラフルなウェアを身につけた女性たちが三々五々集ま

ってきた。小型ラジカセから曲が流れると、談笑していたのがウソのように、真剣な表情に一変。大きな全身鏡を見つめながら、前後、左右、斜めにステップを踏みはじめる――。彼女たちはフラダンス同好会「藤ブアナニ フラレアリア」のメンバーだ。毎週火曜日の午前中に東海健康センターで集まり、2時間ほど練習を重ねている。常時参加するメンバーは現在12名。60代の人が多く、



1



2



3



4

1 平針東海健康センターで上演される大衆演劇。劇団は1カ月ごとに入れ替わる 2 来館者を出迎える「TKC48プロジェクト」のメンバー。多世代交流の一環だ 3 大広間のステージで歌って踊る「TKC48プロジェクト」のメンバー 4 多目的ルームで開かれたバンドの演奏会。利用者の年齢層を広げる新たな試み 写真提供：株式会社TKC

最年少は60歳、最年長は74歳。

指導するのは土田ユリ子さん。この地域でフラダンスの教室を開いていた土田さんが、東海健康センターで教えはじめたのは今から10年前。「14〜15年前から通っていたんです

が、ある日『フラダンスの教室をやりたい』とお願ひしたんです。すると『どうぞお使いください』と二つ返事でした。最高ですよ、こんなに立派なスタジオが無料で借りられるのですから」。

メンバーは入会料を払えば、練習後に風呂に入ってくつろいで、大衆演劇まで楽しめるというわけだ。

趣味を長く続けるには張り合いが必要だが、ここなら発表の場にも事欠かない。ほぼ毎日上演される大衆演劇や歌謡ショーの前座でフラダンスを披露する機会がたびたびあるからだ。土田さんが「10月に『こまどり姉妹』が来ます。前座で5曲くらい踊ってほしいって」と発表すると、メンバーは「わー、楽しみ！」と大喜びだった。

メンバーの加藤朝代さんは大手を振って一日中遊べるこの日を楽しみにしている。「毎週火曜日は朝から夕方遅くまでいます。家族から離れて、私が自由に過ごせる、ストレスのまったくない日なのです」。

長い時間過ごせるのは風呂があるから

東海健康センターを率いる金原さ

んは風呂を「人が集まるインフラ」と考えている。「健康ランドには、お風呂に入ること以外のプラスアルファが求められますが、やはりお風呂は重要です」。入浴は緊張をゆるめてリラクセス感を高め、滞在時間も長くなる。リニューアルに伴い、荒池という名の溜池を借景とする檜の露天風呂をこしらえたのは「インフラ（風呂）の充実」にはかならない。館内には風呂に入ったあとにくつろぐ大広間、喫茶店、居酒屋がそろい、館内着に着替えてのんびりすれば、2〜3時間はあつという間だ。

毎週、風呂を介して長い時間を一緒に過ごしているからだろうか、フラダンス同好会の先生と生徒の垣根は低い。この日の練習では新しい曲にもチャレンジしたが、土田さんもお手本を見せると、メンバーが「先生、こうじゃなかった？」と違うステップを踏んでみせた。指導を受ける側がかしこまらないフランクな関係性も、「人が集まるインフラ」である風呂がつくったものだ。

今の利用者は高齢者が中心だが、金原さんは若年層も呼び込もうと手を打ちはじめた。その一つは同好会のTKCキッズダンスを母体としたアイドルユニット「TKC48プロジェクト」。

エクト」。大広間で毎月ダンスを披露するだけでなく、高齢の来館者の履物を下駄箱まで運ぶ「世代を越えたふれあい」も演出している。

また、60名収容のスタジオでは、ロックバンドや弾き語りに使ってもらおうとPRをはじめた。若い世代も利用することで、多世代の交流が生まれる可能性がある。それは、ご近所づきあいが減った現代社会を補完する大事な役割といえる。

フラダンスという共通の趣味をもつ仲間との同好会活動が新しいコミュニティをつくり、風呂という水空間がそれを後押しして好循環を生んでいる。明日への活力が得られる健康ランドは、「日本版サードプレイス」になり得る場所だと思う。

(2015年9月1日取材)



どこか懐かしい、昭和時代の雰囲気も残る平針東海健康センターの館内。皆思い思いの場所できつろいでいる

「水空間」に浸ると身も心も軽くなる

編集部

本来の「癒し」は
受け身ではない

水には人の心を癒す力があるといわれる。研究論文によると、たしかに水辺にはストレスを軽減する効果がある。では、ストレスで身も心も歪んだ私たちに、水辺や水空間はどんな影響を及ぼすのか。

概説は文化人類学者の上田紀行さんにお願した。上田さんは「癒し」という言葉を最初に使った人物だ。実は、今回の特集の出発点は「水辺の癒し」だったが、癒しという言葉は受動的な感じがするので、使わないでおこうと思っていた。

ところが上田さんが提示した「癒し」とは、「私を癒し、世界を癒す」という思想のもと絆を取り戻し、世界をもっと生きやすい場所にするこ

とで傷ついている自分も癒そうという、きわめて能動的な意味だった。現代社会の問題に警鐘を鳴らす上田さんに、あえて人類の歴史から解き明かしていただいたのは、今の生きづらさがどこからくるのか知りたかったからだ。必要なのは受け身の

「癒し」ではなく、自身がエネルギーをもつこと。仕事以外で「自分がわくわくする何か」を見つけ、生きる喜びを感じられるような「複雑化」がカギになると上田さんは説く。

水辺にひしめく

「夢中にさせる要素」

「複雑化」が必要な現代。私たちはいろいろなストレスを抱えている。その対処法として「三つのR」を教えてくれたのは精神科医の古賀良彦さん。ストレスのない状態に「自分をつくり直すこと」が必要で、特に有効なのは「一瞬でも夢中になること」。取材を振り返ると、たしかに

水辺には夢中になる瞬間が多かった。

ふわりふわりと泳ぐクラゲを眺めるとき。御舟かもめから大阪の街並みを見上げたとき。滝の前で「耳に手を当てて」音を聞き取ろうとしたとき。枯山水を前に座り込み、水の気配を感じようとしたとき。夢中になったそれぞれの瞬間、自分をつくり直していたのだと思ひ至る。

古賀さんは「ホッとしすぎないこ

と」も大切だと言う。ただ休み、リラクセスするだけでは不十分。滝ガールこと坂崎絢子さんに案内していただいた滝では、苔の生えた岩場を歩いて冷や汗をかいた。適度な緊張感もまたストレスを拭い去る。

水辺で得られるのは「安らぎ」よりも「活力」かもしれないと考えたのは、滝巡りの後に「早く仕事がない！」と言った女性がいると坂崎さんに聞いてから。「滝といういちばんフレッシュな状態の水」（坂崎さん）からエネルギーをもらったのだろう。

水に浸る時間

身も心も軽くなる

水に浸る効果を体感したのは「水の癒し力」を五感から設計しているしこつ湖鶴雅リゾートスパ 水の調と、天然温泉を備えた平針東海健康センターだった。仮に平針東海健康センターに風呂がなかったら、同好会活動はここまで盛んだっただろうか。練習後の風呂で身も心も軽くなるから、普段は口にしらない話も飛び出す。互いの心の距離が縮まり、毎

週通うのが楽しみになる。風呂を介したコミュニケーションにはそういう一面があると思う。

興味深いのは、古賀さんが「水のそばに行く」と人はあまり動かなくなる」と指摘したこと。なぜ静かになるのか？ それは上田さんが提示した「水辺は異界との境界線」という観点に答えが潜んでいる。

常に動いている海や川は、今の産業社会における固定化された陸上の生活とはまるで異なる世界だ。そう考えると水辺はまさに境目。そこにたえず人が静かになるのは、異界（水）を眺めていると羊水に浮かんで育ったころの記憶がよみがえり、幸福感に包まれるからなのか。

私たちにとって、水辺や水のある空間（水空間）はどんな存在なのかという問いを、上田さんは「生きづらいつ社会を生き抜くために必要ななものか」と解き明かした。水空間には私たちが夢中にさせて心を解放し、エネルギーを与える力もあるのだと認識すれば、「複雑化」につながる趣味や生きがい、思いもよらない活動の芽が生まれてくるはずだ。

河川の復元を図る



古賀 邦雄 さん
こが くにお

古賀河川図書館長
水・河川・湖沼関係文献研究会

1967年西南学院大学卒業。水資源開発公団（現・独立行政法人水資源機構）に入社。30年間にわたり水・河川・湖沼関係文献を収集。2001年退職し現在、日本河川協会、ふくおかの川と水の会に所属。2008年5月に収集した書籍を所蔵する「古賀河川図書館」を開設。URL: <http://mymy.jp/koga/> 平成26年公益社団法人日本河川協会の河川功労者表彰を受賞。

〔注1〕高水工事
堤防工事や放水路の整備など、氾濫防止のために最高水位を計算して行なう工事。

〔注2〕高水敷
常に水が流れる低水路より一段高い部分の敷地。普段はグラウンドなどで利用されているが、大きな洪水のときは水に浸かる。

最上川と茂吉

河川法目的の変遷

〈最上川の上空にして残れるはいまだうつくしき虹の断片〉と、斎藤茂吉は疎開中に詠んでいる。1945年（昭和20）5月25日東京の病院と自宅は空襲で全焼した。茂吉は故郷山形県蔵王山麓に疎開し、さらに大石田町に移り住んだ。このころの茂吉は、家も焼かれ、彼の歌が戦意高揚として世の非難に曝され、失意のどん底であったという。しかしながら最上川が流れる大石田町の人たちはやさしかった。茂吉は故郷の温かい人情に触れ、最上川の清き流れに日々を過ごし、心は徐々に回復した。最上川岸への雪をふみつつぞわれも健康の年をむかふる」と詠む。

三浦大介著『沿岸域管理法制度論―森・川・海をつなぐ環境保護のネットワーク』（勁章書房・2015）は、森・川・海の連続した空間を沿岸域として捉え、その自然環境保護を図るための「総合的管理」法制度の構築に必要な法制知識と諸問題の解決方法をテーマにしている。この書で「河川法の歴史と仕組み」において、次のように河川法目的の変遷が述べられている。

1896年（明治29）、治水事業への要望が高まり、高水工事（注1）を中心とする治水対策を目的とした河川法が制定された。利水目的は制定されず、その後、日露戦争などによる需要が増大した水力発電に伴う河川流水の利用に対応できず、ようやく戦後に復興需要のために、農林省等の利水のための法整備がなされ、1964年（昭和39）

因する防災のための規定が設けられた。治水と利水を目的とした河川法の制定であった。その後高度経済成長により、公害が発生し、川が汚れ、また治水対策のため、都市部の中小河川はコンクリート三面張りの直線的な河川工事が施工された。このような状況から河川環境の視点が重要視されるようになり、建設省（当時）は1990年（平成2）近自然工法・多自然型川づくり工法の採用を可能とする、自然にやさしい、生態系が孤立しない河川環境の保全を打ち出した。

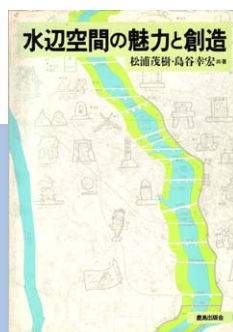
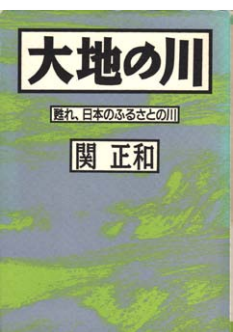
松浦茂樹・島谷幸宏共著『水辺空間の魅力と創造』（鹿島出版会・1987）は、人と水の係り方について、①水神等を祀る信仰活動、②農業・林業・観光等の生業活動、③洗濯、魚とり等の生活活動、④治水、利水、清掃に伴う社会活動、⑤川を場とした創作活動、⑥川を社会科 理科の授業の教材とする教育活動、⑦水辺におけるレクリエーション活動を挙げる。このような活動を与えてくれる重要な水辺は都市化が進むにつれて減少していると分析する。そのために水辺空間の魅力について、河道の特徴を活かし、中の島、砂州などの利用で川に流れをつくり、川の歴史を調べ表示する必要があると説く。

ば、最上川は茂吉を甦らせる河川であった。もし、最上川が汚れていたとしたら早急な茂吉の復活は困難だったかもしれない。わが国における高度経済成長時に汚染され、コンクリート化された河川の復元の変遷を追ってみたい。

小平博之著『斎藤茂吉「白き山」と最上川』（短歌新聞社・2008）によれば、最上川は茂吉を甦らせる河川であった。もし、最上川が汚れていたとしたら早急な茂吉の復活は困難だったかもしれない。わが国における高度経済成長時に汚染され、コンクリート化された河川の復元の変遷を追ってみたい。

法整備がなされ、1964年（昭和39）水資源の総合的利用・開発に寄与するため、従来の区間主義の河川管理体系から水系一貫管理へと移行し、利水関係規定の整備、ダムの設置・操作に起

河川法改正において、河川環境の保全の目的が制定され、なおかつ河川整備計画の策定がなされた。河川環境の整備は、積極的に良好な河川環境を整備すること。河川環境の保全とは水質の維持、優れた景観を有するための区域の保全で、河川工事によって環境に与える影響を最小限度に抑えるための代償措置が講じられることになった。河川環境復元のキーワードとして、水辺空間、多自然型川づくり、親水、河川再生事業が



湧水（オアシス）文化で、噴水に代表される。二つめは溢水文化で、メソポタミア等の乾燥地帯に展開される、水は豊かに注ぐものだとする。三つめは、水は無限に流れるとする日本の流水文化の展開である。山と谷が作りだす複雑な風土とあいまって、日本人の自然観の基調をなす。これら三つの水文化の観点から、水辺空間を創造する。

さらに、水辺の再生をデザインする篠原修ら著『都市の水辺をデザインする』（彰国社・2005）、生態系の復元を図る中村太士編『川の蛇行復元』（技報堂出版・2011）、溜池公園に都市空間をつくりだす和田安彦・三浦浩之共著『水辺が都市を変える』（技報堂出版・2005）は、それぞれ快適な水辺空間を創出する書である。

そのほかに、河川景観を追求する土木学会編『水辺の景観設計』（技報堂出版・1988）、島谷幸宏編著『河川風景デザイン』（山海堂・1994）、『河川景観の形成と保全の考え方』検討委員会編『河川景観デザイン』（リバーフロント整備センター・2008）も挙げておく。

多自然型川づくり

コンクリートで固められた川には生物は棲めない。コンクリート護岸の反省から生物にやさしい川づくりが進んだ。例えば堤防の緩傾斜化、高水敷（注2）の樹木、草木類の活用、水辺のヨシの保全、多段式及びスロープ式落差工、蛇籠、巨石等多様な空隙構造

をもつ材料の活用などの工夫である。ニュアンスは異なるものの、この川づくりは多自然型河川工法、近自然河川工法、あるいはビオトープ河川工法と呼ばれている。

1990年（平成2）11月、建設省河川局から「多自然型川づくり実施要領」の通達が出された。「多自然型川づくり」とは、河川本来の有している生物の良好な生育環境に配慮し、あわせて美しい自然景観を保全あるいは創出する事業の実施をいう」と定義する。

この川づくりの考え方は、愛媛県五十崎町「町づくりシンポの会」の人たちが、1985年（昭和60）にスイスの川を視察して日本へ導入したのが始まりである。スイスの川づくりを訪ねたクリスチャン・ゲルディ・福留脩文共著『近自然河川工法の研究』（信山社サイテック・1994）、バイエルン州内務省建設局編『道と小川のビオトープづくり』（集文社・1993）、島谷幸宏著『河川環境の保全と復元』（鹿島出版会・2000）がある。掛水雅彦著『川の外科医が行く』（高知新聞社・2011）では、近自然工法の魁者・福留脩文の施工河川を追っている。豊田市の児ノ口公園、高知市境の吉原川、高知県津野町の四万十川支流・北川川は近自然工法により、河川が見事に復元された。

河川行政の立場からの関正和著『大地の川―甦れ、日本のふるさととの川』（草思社・1994）で、多自然型の川づくりの理念として、次のように述べ

てある。「われわれ人間は招かれた客としてこの自然を訪れている。したがって、人間の都合で勝手気ままに自然を改変してはならない。自然の改変を必要最小限にとどめ、改変する場合にも別の形で自然を復元し、あるいは創出する努力をすべきである。それが人間と自然の調和ある共存を可能とする」と論じる。関氏には河川哲学がある。

親水空間論

河川の機能は、治水機能、利水機能、そして親水機能をもつと、土屋十因著『都市河川の総合親水計画』（信山社サイテック・1999）では論じ、親水機能として、水と周辺の生物などに接する心理的満足や水遊び、住民の憩い、コミュニケーションの場、景観などを掲げ、潤いのある水辺空間を追求する。

1990年（平成2）農林水産省が推進する「水環境整備事業」に鑑み、水路における親水空間を捉えた渡部一二著『水路が喜ぶ水路の親水空間計画とデザイン』（技報堂出版・1996）がある。実際に札幌市の創成川、福島県の大内宿の水路、熊谷市の星川、郡上八幡の水路、三島市の源兵衛川、黒磯市の巻川用水が並ぶ。

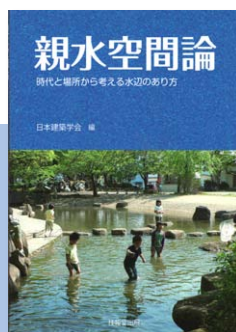
「都市生態学的視点による親水行動論」のサブタイトルのある畔柳昭雄・渡邊秀俊共著『都市の水辺と人間行動』（共立出版・1999）は、都市化によって身近な自然やオープンスペースが減少したことから、人々は潜在的に自然のふれあいを求める。ここに親水

行動が生じる。こういう行動は、周辺から失われた自然環境を補完するものとして、水辺空間、親水空間が優先的に選択されると分析する。日本建築学会編『親水空間論』（技報堂出版・2014）は、海の親水事例として京都の伊根の舟屋、広島県の厳島神社、青森の木野部海岸、河川の親水として、京都の鴨川、湖沼の親水として茨城県の古河総合公園、東京の浜離宮恩賜庭園などを挙げています。

河川再生事業

河川再生事業については、日本河川・流域再生ネットワーク編『よみがえる川―日本と世界の河川再生事例集』（リバーフロント整備センター・2011）、渡辺豊博著『清流の街がよみがえった―地域力を結集グラウンドワーク三島の挑戦』（中央法規出版・2005）、日本水環境学会WE21編集委員会編著『みんなで作る川の環境目標』（環境コミュニケーションズ・2004）がある。おわりに、黄祺淵ら著『清溪川復元』（日刊建設工業新聞社・2006）、朴賛弼著『ソウル清溪川再生』（鹿島出版会・2011）を掲げる。

関氏が指摘するように、河川の復元を図るとしても自然との共存の観点を忘れてはならない。そうでなければ、河川も人も生きてこない。茂吉が復活したのは自然との共生が根底に存在したからであろう。（手柴登美）



米と杉と鉾山が生んだ 「きりたんぽ」

水と風土が織りなす食文化の今を訪ねる「食の風土記」。今回は秋田県の「きりたんぽ」です。清らかで豊かな伏流水が育む米、そして鉾山で働く人から伝わったしょうゆを用いた「きりたんぽ鍋」は、秋田の郷土料理として広く知られています。〈発祥の地〉といわれる秋田県北東部の鹿角市を訪れ、その由来や食べ方について見聞きました。

食の風土記 3

きりたんぽ (秋田県)

写真：山で働く木こりや炭焼きの人々が、手折ったたんぽを鍋に放り込んだのがきりたんぽ鍋のはじまりといわれている

山に籠る人々の間食

ぐつぐつと煮立った鍋の蓋を開けると、しょうゆの匂いが立ちのぼり、きりたんぽが姿を現した――。

きりたんぽは、炊き立てのご飯を粘りが出るくらいに潰し、おにぎり状にして杉の串に握りつけ、火であぶって串を抜いたもの。鍋に入れる際に手折るからきり(切り)たんぽといわれるが、手折る前は「たんぽ」と呼ぶ。

そう教えてくれたのは、発祥の地鹿角きりたんぽ協議会の岩船勝広会長。たんぽの語源は、①がまの穂(短穂)に似ている、②串に握りつけるときの形が稽古用の槍(たんぽ槍)にそっくりという二つの説がある。たんぽの基本的な食べ方は二通り。一つが鶏肉から出汁をとったしょう

ゆベースの「きりたんぽ鍋」。主な具材は鶏肉、きのこ、せり、ねぎ、ごぼう、こんにゃく。もう一つがみそを塗って火で炙る「みそづけたんぽ」だ。

文献が残っていないため年代こそはっきりしないものの、そもそもたんぽは山に入って杉などを伐り出す山子と呼ばれる木こりや炭焼きの人々の間食だったという。「おにぎりを持参してもすぐに硬くなってしま





史跡 尾去沢鉱山の内部。巨大な採掘跡や当時の作業風景などが見られる



漬したご飯を握りつける杉の串。始まりは杉の枝とされている



鹿角市内の水田。清らかで豊かな伏流水が米を育む

うので、杉の枝に刺して焚火で炙って食べていたようです」と岩船さん。これが見えつけたんぼにつながる。また、山でキジやウサギを捕まえてつくる鍋に、手折ったたんぼを放り込んだのが、きりたんぼ鍋の原型とされる。

伏流水が育む米

ここで疑問を抱く人もいるだろう。古くから冷害に悩まされてきた東北地方で米は貴重ではないのかと……。 「いえいえ、秋田は昔から稲作が盛んでした。夏は気温が上がりますし、水も豊富です」と岩船さんは言う。 たしかに秋田地方は豪雪・寒冷であるものの、夏季は暖流の影響もあって高温になるうえ、雪は豊かで清らかな伏流水をもたらず。天候さえ順調ならば米づくりに適しているのだ。事実、米と杉と金銀鉱は戦国時代からこの地の三大資源とみなされていた。

金などを採掘する鉱山もまた、大きな影響を与えた。鹿角市には708年（和銅元）の発見と伝わる尾去沢鉱山がある。しょうゆをこの地に持ちこんだのは、全国からここに集まった鉱員だといわれている。

「鉱山のおかげでしょうゆという新しい食文化が入り、今のきりたんぼ鍋になりました。それ以前はみそ鍋だったはずですよ」（岩船さん）

史跡 尾去沢鉱山の米田将好係長は「実は尾去沢鉱山こそがきりたんぼ発祥の地という説もあるのです」と明かす。坑道に梁を架けるため、木を伐りに出た鉱員が、山子と同じように外で調理していた可能性がある。その証拠は、きりたんぼ鍋にこんにゃくが必ず入ること。

「当時、こんにゃくは鉱山で働く人の肺によいとされ、食べることが推奨されていたのです」（米田さん）

鹿角市が（発祥の地）と名乗るのは、隣接する大館市の料亭が「これは鹿角市のスタイル」と明言してしょうゆベースのきりたんぼ鍋を供したこと。それが秋田市の料亭に伝わり、さらに県内へ広がっていったという経緯がある。

岩船さんは「旬のときに食べてほしい」と願う。旬は秋だ。新米が出回り、きのこもせりも豊富にある。市内には、オリジナルのきりたんぼ料理を提供する店が並ぶ「きりたんぼ通り」もある。（発祥の地）の味を、ぜひ一度は味わっておきたい。

（2015年8月27〜28日取材）



撮影に協力してくれた「郷土料理 美ふじ」の加藤照子さん（左）と安保（あんぼ）由貴さん。加藤さんが手にするのはがまの穂
鹿角市「きりたんぼ通り」にて

きりたんぼ鍋の基本的な食材。上からせり、ねぎ、舞茸、比内地鶏、ごぼう、こんにゃく（糸こんにゃく）、きりたんぼ



発祥の地 鹿角きりたんぼ協議会の岩船勝広会長

たんぼの製造工程。炊き立てのご飯①を粘りが出るくらいに機械で潰す②。おにぎり状にして杉の串に握りつけて③、火であぶる④

撮影協力：柳田きりたんぼ店

出る杭がつくる 「選ばれるまちづくり」

——石巻は人口減少社会の先端型か？
宮城県石巻市



中庭 光彦 さん
なかにわ みつひこ

多摩大学経営情報学部事業構想学科教授
多摩大学研究開発機構総合研究所副所長

1962年東京都生まれ。中央大学大学院総合政策研究科博士課程退学。専門は地域政策分析・マネジメント。郊外や地方の開発政策史研究を続け、人口減少期における地域経営・サービス産業政策の提案を行なっている。並行して1998年よりミツカン水の文化センターの活動にかかわり、2014年よりアドバイザー。主な著書に『オーラルヒストリー・多摩ニュータウン』（中央大学出版部 2010）、『NPOの底力』（水曜社 2004）ほか。

人口減少期の地域政策を研究し、自治体や観光協会などに提案している多摩大学教授の中庭光彦さんが「おもしろそうだ」と思う土地を巡る連載です。将来を見据えて、若手による「活きのいい活動」と「地域の魅力づくりの今」を切り取りながら、地域ブランディングの構造を解き明かしていきます。その土地ならではの魅力や思いがけない文化資産、そして思わぬ形で姿を現す現代の水文化・生活文化にご注目ください。今回は、全国の人たちから「選ばれるまち」にしようと、過去や前例にとらわれない若者たちが奮闘している宮城県石巻市です。



石巻での幸運な出会い

7月末の暑い日に石巻市(注)を訪れた。旅は最初に出会った人が肝心だ。いわば水先案内人ともいえる人がいろいろと教えてくれると、旅は驚きに満ちたものとなる。石巻市復興まちづくり情報交流館中央館(以下、情報交流館)に立ち寄り、まず言葉をお交わしたのが館長のリチャード・ハルバーシュタットさんであったことは、まさに幸運だった。

リチャードさんは石巻在住22年。

石巻専修大学で英語を教えていた。被災しても本国に戻らなかったイギリス人として地元では有名な方だということ、帰京して知った。

「今、石巻はイタリア料理店の激戦地です。7〜8軒はあるかな」と貴重な情報を教えてくれた。昨年来たときは夜の飲食店を探すのに苦労したのだが、回復が進んでいるらしい。「石巻の魅力は何ですか?」と伺うと「人が温かい。コミュニティの一員として受け入れてくれます」。さらに興味深いことをおっしゃった。「でも、イギリス人は地震がないレング文化で、同じ建物を何人も続けて使う。だからイギリス人の土地への愛着は強い気がします」

愛着かあ。人がある土地に移ってきたり、出て行くのは、仕事の有無だけではなく、この「愛着心」がものをいう。「ボランティアで残った若い人が住み着いている例も出てきています」と聞くと、「移動」というキーワードが頭から離れなくなった。人を受け入れる文化、新たな住民の流入、土地への愛着心。移動をめぐる文化から、現在の石巻がわかるかもしれない。そんな確信が湧いてきた。

全国と同じ人口減少傾向

今、政府は人口減少を重要政策課題として掲げ、全国自治体にその対策を求めている。石巻市は震災で大きな被害を受けたが、他の地方都市と同様1990年代から人口減少も続いていた。2005年、周辺6町との合併を経て、10年経った現在の人口は約14万9000人だ(2015年7月末時点)。

石巻市の仮設住宅入居者は1万152名(4798戸。石巻市「応急仮設住宅一覽等」2015年9月1日時点)。この方たちが入居する災害公営住宅は4500戸計画されているが、完了したのは1324戸。着手戸数が3

石巻市復興まちづくり情報交流館中央館(写真下)の館長を務めるリチャード・ハルバーシュタットさん。震災後も石巻に留まったことで、地元の人とより深い関係が築けたという



石巻市立町にあるイタリアンレストラン「ダフ」の外観と料理。市内には相次いでイタリア料理店が outlet しているようだ



(注) 石巻市は幅広く、南は牡鹿半島、東は雄勝(おがつ)町や北上町まで含む。今回扱うのは中央、立町、千石町、といった中心市街地である。

右: 日和山公園から石巻市の市街地と旧北上川を望む

422で24%が未着手の状態である
 (宮城県「復興の進捗状況」2015年8月11日より)。

公営住宅の完成を急ぐことは当然だが、それと同時に人口減少していくなかで、まちの生活水準をどの程度で持続させるかも考えねばならない。

公営住宅を建てると同時に、まちに住みつづけるような魅力をつくらなければ新たな若い層が続かない。復興だけではなく、人口減少の観点からまちづくりをしなければならぬ訳がここにある。

いったい石巻には、どのような人が弾みを与えているのだろうか。

まちを動かす人が変わってきた？

そんなことを思いながら、まちを歩こうと思うと、早くも昼過ぎだ。昨年は仮設商店街の「石巻まちなか復興マルシェ」(以下、復興マルシェ)で海鮮丼を食べた。でも、今そこは空き地になっている。仮設商店街は独立行政法人中小企業基盤整備機構の事業で、昨年11月末で終了していたのだ。今は情報交流館の隣に同様のマルシェ「橋通りCOMMON」

ができており、トレーラーハウス等の7店が集まっている。そこで焼き鳥丼と石巻焼きそばと沖縄マンゴーの豆乳割りを食べたのだが、どうも昨年訪れたときは雰囲気が違う。店主たちが若いのだ。

20歳代とおぼしき二軒の店主男女に声をかけると、ともに沖縄からボランティアでやってきて石巻に住み着いたという。

「知り合いにすぐに会話し、大きないいところがありますよ。住み心地もいいし。なんか沖縄の人と石巻の人は氣質が似ているですよ」と話してくれた。

広場で食べていると、結構若い人たちが入れ替わり立ち替わりやってくる。

昨年見聞した復興マルシェは「地の飲食店と観光客」が集う場だったのだが、ここは「外からやって来た若い新規開業者と石巻が好きなお客たち」という関係となっている。

雰囲気が違うのも当然だ。まちのプレイヤーが変化しているのだ。そのような目で周辺を歩くと、公営住宅とともに一般分譲マンションも売り出されている。モデルルームの人に成約率を聞くと7割だという。「石巻の一人当たりのスナック店舗

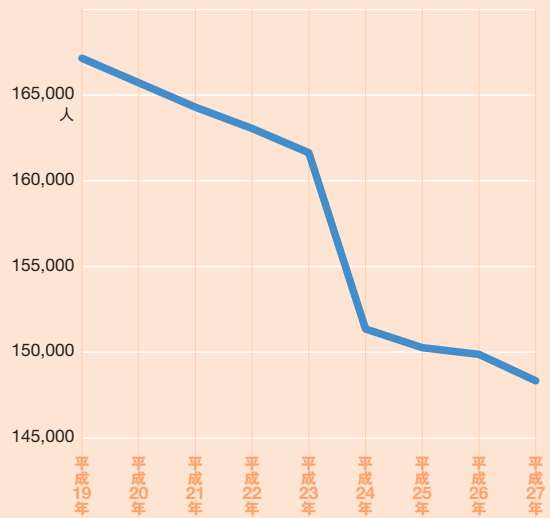


図 石巻市の人口推移

震災の影響はもちろん大きいものの、震災前から人口が減少していたことがわかる
 出典：宮城県統計資料より筆者作成



橋通りCOMMONのトレーラーハウスで飲食店を営む東恩納寛武さん(ひがしおんなひろむ)。沖縄の今帰仁村(なきじんそん)出身。橋通りCOMMONの出店者代表も務める

橋通りCOMMONでいただいた昼食メニュー。右は石巻焼きそばとマンゴーの豆乳割り、左は焼き鳥丼とマンゴージュース



借しまれつつ2014年11月に閉店した仮設商店街「石巻まちなか復興マルシェ」(2014年6月14日筆者撮影)

数は日本一だ」という人もいるのだが、たしかにスナックも夜は賑やかに営業している。

地方でよく見る「住宅化しつつある中心市街地」に戻ってきている。そう、私には思えた。

でも「沖縄と石巻が似ている」とは、どういう意味だ？

若い個店経営者を集める

『橋通りCOMMON』の土地は、こちらで用意しました」と話すのは、石ノ森萬画館の指定管理者も任されている「株式会社街づくりまんぼう」課長の大森盛太郎さんだ。このまちづくり会社は2001年、中心市街地活性化のためにTMO（タウンマネジメントオーガニゼーション）として誕生した。

大森さんは生粋の石巻人。

「復興マルシェは昨年11月30日で閉めたんです。でも定住と交流のためにも賑わいは必要でした。そこで民有地を借りて、トレーラーハウスを東京からもってきた。それをチャレンジショップとして、石巻で店を始めた人を集めたわけです。だから、ボランティアで残っていた人も多い。昨年までの仮設商店街は、原則被災

者の店舗だったわけですが、橋通りCOMMONは、いろいろなチャンネルを見いだしてもらえようかな、人が入っている。そうでないと、まちづくり会社としては意味がないですから」とおっしゃる。

なるほど、橋通りCOMMONはやる気のある若い人のためにつくられた場だったのだ。

「復興の過程でワークショップをたくさん行なったわけですが、話しやすいけれど物事が動かない。言葉に出すことは大事だけど、それ以上にまず自分たちでやってみないとだめでしょうという行動力のある方が出てきた。そういう方が中心に動いているのが石巻の現状です」

大森さんもそのようなメンバーの一人なのだろう。現在、街づくりまんぼうでは生鮮マーケットを旧北上川沿いにつくる計画を進めている。

フラットな場をつくりたい

その石巻には全国的に見てもユニークなまちづくり団体がある。「一般社団法人ISHINOMAKI 2.0」(以下、石巻2.0)だ。ホームページ(HP)にはこのように書かれている。

「石巻は生まれ変わります。3・11



橋通りCOMMONを仕掛けた株式会社街づくりまんぼうの課長を務める大森盛太郎さん(せいたろう)。下は周辺の再整備が進む石ノ森萬画館



橋通りCOMMONでオリジナル料理を供する徳竹奈央さん(とくたけなお)。長野出身だが沖縄に移住。震災を機にボランティアとして石巻へやってきた

夜の橋通りCOMMON。顔なじみが多いのだから、店主とお客との距離が近い



前の状態に戻すなんて考えない。昨日より今日より、明日を良くしたい。自由闊達な石巻人のDNAで、全く新しい石巻にならなくてはいけない。石巻2.0。私たちは新しい石巻を、草の根的につくりまします。」

代表理事は松村豪太さん。大森さんの2歳先輩だ。

石巻の魅力は何ですかと、まずはお決まりの質問をした。

「フラットにものを考えたり、つながったりすることができると可能性がある。それと2011年だけで延べ28万人のボランティアが来ています。残っている人、あるいはいったん離れたけれど戻ってきた、あるいは戻ってきたという人が相当数います。われわれの団体で顔を思い出しながら数えても300人ぐらいの人が移住しています。これはたいへんな数字です。彼らがこのまちの可能性です」とおっしゃる。

フラットにゆるくつながるためには、共通の居場所が必要になる。松村さんは「最小限の構成要素はテーブル、イス、インターネットの3つ」と言う。インタビュートした「IRORI」と呼ぶ事務所スペースは、元はガレージ。そこに1時間ほどいたのだが、十数人の方が出入りした。

弁当を食べたり、PCを開いたり、コモングの雰囲気気持ちはいい。

石巻を選んで住む 「人の誘致」

松村さんは「人の誘致」という言葉を使う。人口を増やすために企業や工場を誘致するのは定石だが、「それは望んで石巻に来る人ではない。そんな人が1000人来ても意味があるのでしょうか。ここを選んで住む人が大事です。極端に言えばステイブ・ジョブズのような天才が一人、ここを気に入って住むことの方が大事なのではないか。ですから変わった人がこのまちを楽しめる、住みたいと思わせる。それを考えていろいろなプロジェクトを行なっています」と言う。

「選択的に住む」のが重要だというのだ。人の誘致のためには、魅力を提供するソフトが必要だ。そこで、石巻2.0には多数のプロジェクトがながっている。HPを見るとわかるが、例えばソフト開発を行っている「イトナブ石巻」、空き家支援の「石巻2.0不動産」、かっこいい漁師を募集して空き家を拠点として生業をつくる「TRITON PROJECT」。三陸



3 一般社団法人ISHINOMAKI 2.0の代表理事を務める松村豪太さん。「震災を機に石巻に住みはじめた人たちがこの街の可能性」と語る

4 オープンシェアオフィス「IRORI」。ガレージというストックを活かしたこうした場の設置も「人の誘致」を促す

5 石巻のさまざまな活動が記された「IRORI」のホワイトボード。ここを訪れた人に新しい情報を常に伝えている



1 石巻駅前にある新築分譲マンション「石巻テラス」のモデルルーム。成約率は順調に上がっているという
2 モデルルーム内に展示している石巻中心部の新築物件情報。住宅化は着々と進んでいる



の食をビジネスにつなげるなどさまざまなコーディネートを行なう「まさびズ」。

おもしろい地域プロジェクトをマルチで行なえば、身の丈に合った事業ができるし魅力も生み出せる。

川の文化と海の文化？

石巻での旅は、この地の来歴を思い起こさせる。河口港に堆積する砂、外洋からの津波・高波と闘いながらも、北上川舟運の拠点として、また戦後には水産加工の拠点として栄えさせた石巻の人々。

治水をこらし農業用水、工業用水、生活用水などが流域を潤すのが「川の文化」とすれば、舟運、港湾、市場、水産資源管理などは沿岸を潤す「海の文化」ともいえる。前者は広域定住の色が強く、後者はネットワーク的で移動の色が濃い。港という場はまさに海の文化の拠点で、高い水産加工技術をもっているなど、選ばれる価値をもっていないければ船は寄りつかない。今回伺った石巻の人々の考え方は、被災による断絶を抱えながらも移動を資源にする港の人々の文化を連綿と受け継いでいるように思えたのだ。

全国のボランティア支援者という大規模なネットワークと移動者の力を借りて回復を進め、「選ばれるまち」をつくり、定住を促進する。それは、船に選択される港のようなまちをつくっているのであって、何代も住み続ける定住者が「変わらぬまち」をつくっているのとは異なるのだろう。

海の文化 vs 川の文化。こう思い至ったとき、「沖繩と石巻が似ている」と話した若い店主たちの心の意味が、自分なりにわかった気がした。

海の文化・石巻の「選ばれるまちづくり」は「変わらぬまち」の先にある人口減少社会の先端ケースとなるのかもしれない。

〈魅力づくりの教え〉

出る杭となる人々と外からの人々がフラットにつながると、新世代の魅力が生まれ移動が起きる。そのためには小さいけどおもしろいプロジェクトをマルチで進めることが重要。

(2015年7月26〜27日取材)



6 イタリアン、フレンチ料理などの飲食店やシェアハウスからなる複合施設「COMICHI (コミチ) 石巻」。2015年9月27日にオープンした



7 取材時は「ISHINOMAKI STAND UP WEEK 2015」の期間中。「世界で一番面白いまちを作ろう。」をテーマに2011年から毎年開催。石巻の未来づくりが凝縮されたイベントだ

8 画家の吉本伊織さんが石巻の風景を描いた全長27mの壁面に、訪れた人が石巻への願いを短冊に描いて壁に掲げる参加型アート「セタに願いを」

9 三陸産「ホヤ」とおっぱいを風船でオマージュした「HOYAPAI」の会場



恐ろしくも美しい魔性の川 黒部川 (富山県)

川系男子 坂本貴啓さんの案内で、編集部の方々が全国の一級河川「109水系」を巡り、川と人とのかわりを探りながら、川の個性を再発見していく連載です。

川名の由来【黒部川】

水源を長野、富山県境に聳える鷲羽岳に発し三十あまりの川と合流し黒部市、入善町境で富山湾に注ぐ川。クロベは「クネベツ」でクネは暗い、黒の意、ベツは川の意。アイヌ語のグルベツ（魔の川）また、黒部奥山のねずこに由来するという説もある。

109水系

1964年（昭和39）に制定された新河川法では、分水界や大河川の本流と支流で行政管轄を分けるのではなく、中小河川までまとめて治水と利水を統合した水系として一貫管理する方針が打ち出された。その内、「国土保全上又は国民経済上特に重要な水系を政令で指定したもの」（河川法第4条第1項）を一級水系と定め、全国で109の水系が指定されている。

坂本 貴啓 さん

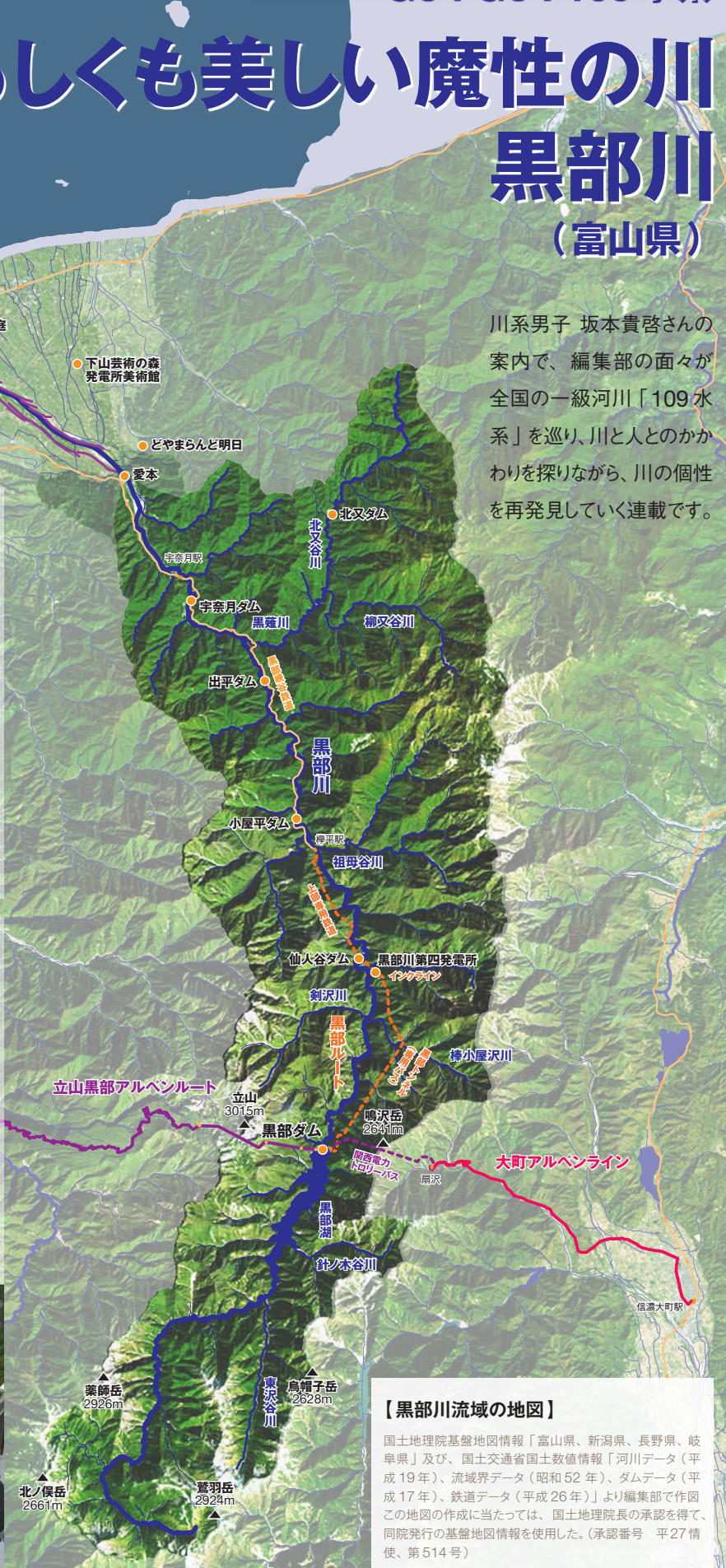
さかもと たかあき

筑波大学大学院

システム情報工学研究科 博士後期課程

構造エネルギー工学専攻 在学中

1987年福岡県生まれの川系男子。北九州で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ちはじめ、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC（青少年博物学会）、大学時代にはJOC（Joint of College）を設立。白川直樹研究室「川と人」ゼミ所属。河川市民団体の活動が河川環境改善に対する潜在力をどの程度持っているかについて研究中。



【黒部川流域の地図】

国土地理院基盤地図情報「富山県、新潟県、長野県、岐阜県」及び、国土交通省国土数値情報「河川データ（平成19年）、流域界データ（昭和52年）、ダムデータ（平成17年）、鉄道データ（平成26年）」より編集部で作図。この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の基盤地図情報を使用した。（承認番号 平27情使、第514号）

魔性の美しさ

黒部川の流域は、迫力ある放水で知られる黒部ダム、黒部川峡谷沿いの宇奈月温泉、黒部川扇状地の湧水群などがあり、観光地としても有名です。ある水文学者は「黒部に1週間滞在して現地の水を飲みつづけると、体の内側から自身の体が浄化されていくような感覚になる」と称するほどです。

人々を魅了してやまない黒部川は「美の川」といえますが、私はもう一つ忘れてはいけない側面があると思っています。「魔性の川」としての性質です。それは、黒部川流域の気象と地形を見ると一目瞭然です。

黒部川流域は3000m級の山々を水源とし、流域の80%が山岳地帯を流れています。上流域では雨や雪が多く、年平均降水量が4000mmを超えます。急流河川に豊富な水が常に流れるため、ひとたび雨が降れば山々の土砂を削り落とし峡谷に押し

し流す剛力と、下流の扇状地帯をいとも簡単に飲みこむ氾濫ぶりを発揮します。

これこそが黒部川のもう一つの姿です。しかし、人々は魔性の性質に立ち向かってきました。黒部ダムをはじめとする電源開発、扇状地の流水客土、黒部川の治水の術。どれをとっても困難を極めた大事業です。

今回は魔性の川、黒部川と人々がどのように向き合ってきたかについて探っていきます。

黒部川

水系番号	: 38	
都道府県	: 富山県	
源流	: 鷲羽岳 (2924 m)	
河口	: 日本海	
本川流路延長	: 85 km	59位 / 109
支川数	: 25 河川	94位 / 109
流域面積	: 682 km ²	81位 / 109
流域耕地面積率	: 0.2 %	109位 / 109
流域年平均降水量	: 3997.90 mm	1位 / 109
基本高水流量	: 7200 m ³ /s	43位 / 109
河口の基本高水流量	: 7362 m ³ /s	57位 / 109
流域内人口	: 1727 人	109位 / 109
流域人口密度	: 3 人 / km ²	109位 / 109

(基本高水流量観測地点: 愛本(河口から13.4km地点))
河口換算の基本高水流量 = 流域面積×比流量(基本高水流量÷基準点の集水面積)
データ出典: 「河川便覧 2002」(国際建設技術協会発行の日本河川図の裏面)

写真: 榎平駅そばの黒部川。中流域でもこの険しさである。上流域はまったく人を寄せつけない



峡谷に道を通した 想像力と執念

黒部ダムの建設が大事業だったことはよく知られていますが、その理由をご存じですか？ 山奥にどうやって大量の資材を運んだか想像してください。実は、ダムそのものをつくることと同じくらい、道を確保することは困難でした。

当初、ダム建設に必要なアクセス道がいくつかわけられました。黒部ダムに行くには長野県側からの大町ルートと富山県側からの立山ルート、そして富山県宇奈月からの「黒部ル

1 富山県黒部市の樺平から仙人谷まで黒部川上流沿いに約 13 km にわたって延びる「水平歩道（すいへいぼどう）」。

岩盤をくり抜いた絶壁にあるため、ひとたび転落すると命にかかわる事故となった 『土木建築工事画報』第 16 巻 2 号〔昭和 15 年〕表紙写真「黒部の峻嶒、工用機運搬」 写真提供：土木学会 土木図書館

2 峡谷の景観維持のために行なわれる「観光放水」。

黒部ダムは河口から約 55km の地点にある

3 黒部ダムのレストハウスが提供する「黒部ダムカレー」。

アーチ式ダムの特徴をよく表している。今では長野県大町市のさまざまな店舗で食べられ、ご当地グルメとなりつつある

4 関西電力株式会社 北陸支社 コミュニケーション統括グループの谷本悟さん



5・6・7 SF 映画に出てくるようなフォルムのインクライン。標高差 456m を 20 分かけてゆっくり下っていく。1959 年（昭和 34）の竣工。黒部川第四発電所を建設するための運搬用としてつくられた

8・9 自然環境を守るため、すべて地下式になっている黒部川第四発電所。水圧鉄管（導水管）からの水を受けて巨大な水車を回して発電する



10・11 黒部川第四発電所から下流には上部専用鉄道で下りる。最初はひんやりした地下道だが、熱気がこもる『高熱隧道』も通る

12 樺平からは黒部峡谷鉄道で地上を行く。峡谷美とともに発電所やダムが楽しめる



「黒部ルートは黒部ダムから樺平まで」です。当初はどちらもダム建設の資材運搬路として利用されましたが、立山ルートと大町ルートは現在観光に活用されています。ただし、雪深いため冬場は閉鎖されます。そこで、黒部ダムを年間管理するために使われるのが「黒部ルート」です。通常は工事関係者専用ですが、夏から秋にかけて関西電力の主催で「黒部ルート見学会」が行なわれています。

黒部ダム関連施設を管理する関西電力北陸支社の谷本悟さんに、黒部ルートをご案内いただきました。

「黒部ルートは黒部ダムから樺平までのルートで、樺平からは黒部川に沿って宇奈月まで冬期歩道が通っていて、管理者が年中利用できます。この道を通じ、黒部峡谷沿いにある各発電所にアクセスするのです。樺平までのルートは、ダムの右岸側の入口からトンネルで潜り、専用バス、インクライン、上部専用鉄道を乗り継ぎ、樺平へ到着します。皆さん、はぐれずに付いてきてくださいね」

ヘルメットをかぶり、いよいよ出発です。数多くのインフラ設備が張り巡らされ、複数に分岐した道が広がる様はまるで地底都市です。

「インクラインとは貨物運搬用のケ

〔注 1〕

『高熱隧道（こうねつずいどう）』は吉村昭の長編小説。1967 年（昭和 42）に刊行された。

1ブルカーのこと。34度の角度のレールを上り下りします。このトンネルの横には47・2度の角度で、黒部ダムからの水圧鉄管も通っています」

車体の前面の窓から下の様子を見ると、まるで地下空間に吸い込まれていくようです。インフラ好きにはたまらない乗り物。下っている間、私の心は歓喜に満ちあふれています。

インクラインを下ると、黒部川第四発電所があります。設備のすべてが地下空間にある全地下式発電所です。地下道のみならず、突如巨大な地下迷宮が姿を現したことで、私の興奮は最高潮に達しました。

谷本さんの案内は続きます。

「黒部川第四発電所より先(下流)へ移動するには専用トロッコ電車(上部専用鉄道)を使います。小説(注1)にもなった『高熱隧道』という火山熱のある区域を通るので熱に強い車体です。かつて隧道を掘り進む際、熱さのため後方から水をかけながら掘り進めたそうです。大町トンネルの破砕帯の工事では冷水が吹き出し苦労しましたが、ここでは熱さに苦しんだのです」

熱さと寒さに苛まれながら掘り進

めるのがいかに大変か、トンネルの各所に先人の苦労が偲ばれます。

暗く長いトンネルを抜け、樺平まで出てきました。樺平からは地上で、黒部川を横目に黒部峡谷鉄道で下り、途中にある発電所やダムを多く確認できました。宇奈月まで下ったところで谷本さんはおっしゃいました。

「非常に険しい地域ではありますが、大きな水力エネルギーを生み出す川でもあり、関西の電力の安定供給に重要な川です。われわれ現在の電気事業者は、この先人がつくった大切な設備を守っていくことに強い使命感をもって仕事をしています」

人を寄せつけなかったこの険しい峡谷を見て、「ここから多くの電気を送ることができる」と経済発展への未来の希望を描いた想像力と、「どんな困難も乗り越え電源開発を成功させる」と峡谷に道を通すことを決してあきらめなかった先人たちに、ただただ敬意を表するばかりです。

水の力で山土砂を扇状地へ

黒部ダムから黒部川の峡谷沿いを下ってくると、愛本地区から急に視界が開けます。黒部川扇状地です。

渓谷の岩々を激しい流れが削り取り、

土砂を富山湾まで運んでいきます。

この土砂が長い時間かけて堆積してできたのが黒部川扇状地です。愛本地区を要として左右60度に開く扇状地は自然がつくり出した地形美です。扇状地は地下に水を浸透させやすく地下水が豊富で、自噴井が数多く存在します。一方で地下に浸透しやすい性質から、水はけがよすぎて農業には不適な面もありました。

黒部川扇状地の農業水利について黒部川扇状地研究所の事務局次長、広田登さんにお聞きしました。

「黒部川扇状地の水田は玉石混じりの砂地のため、水が浸透しやすい状態。ですから大量の水を灌漑する必要がありました。さらに険しい渓谷からの冷水で水田の水の温度が上がらず、稲は冷水被害を受けました。そこで古い扇状地帯の山から赤土を掘り出し、それを水に溶かし泥水をつくらせて水路から水田に流し、地下に水が浸み込みにくい土壌をつくりました。この方法を『流水客土』といいます。これで冷水被害が減り、米の収穫量が増えました」

大量の土砂を、水路と木樋を使って扇状地の広範囲に移動させた大きなスケールの発想力。扇状地を穀倉地帯に変えた技術に感動しました。



16



15



17

15 どやまらんど明日(あけび)キャンプ場付近に残る「流水客土」の採土跡。黒部市宇奈月町明日土山(どやま)という地名からも赤土を運び出した歴史が垣間見える

16 ハバと呼ばれる古い河岸段丘から崖下の合口用水路を越えて水田まで赤土を運んだ水路跡。ここはコンクリート製で、合口用水路の上は木樋を通していたそうだ

写真提供：黒部川扇状地研究所

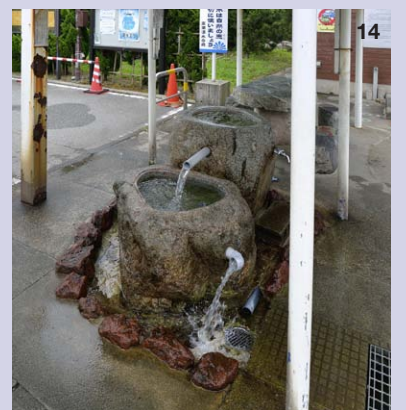
17 扇状地のなかにも古い段丘がいくつかある。写真は下山芸術の森 発電所美術館の展望塔から見た段丘と散居村



13

13 扇状地を案内してくれた黒部川扇状地研究所 事務局次長の広田登さん

14 黒部川右岸の入善(にゅうぜん)町は伏流水が豊富。「黒部川扇状地湧水群」として名水百選に指定されている(高瀬湧水の庭)



14



21 宇奈月ダムはダム機能の維持および下流の河床低下や海岸侵食への影響を考慮して、流入した土砂を川の流れを使って積極的に排砂している 19 宇奈月ダム内部の排砂設備。大人4人でようやく抱えられるほどの太さ 20 宇奈月ダムの構造について説明する国土交通省 北陸地方整備局 黒部河川事務所 宇奈月ダム管理所 ダム課ダム係長の山田和昭さん 21 国土交通省 北陸地方整備局 黒部河川事務所の副所長を務める森田賢治さん



急流河川の治水の術^{すべ}

黒部川の降水量と急勾配は電源開発という恩恵をもたらしますが、洪水も多く起こりましたので、昔からさまざまな治水の術がなされてきました。コンクリートのない時代は丸太を組んだ「川倉」や「蛇籠^{じまかご}」と呼ばれるものを河道に入れ、川岸に水が当たるのを防ぐ努力を行ないましたが、日本屈指の暴れ川を制御するのは困難でした。

明治時代にはお雇い外国人のオランダ人技師、ヨハニス・デ・レイケ（注2）により治水事業が行なわれました。デ・レイケは治水事業に霞堤^{かすみでい}を採用します。霞堤とは急流河川で使われる治水の術。こま切れの連続していない堤防で、ところどころ二重に重なっています。これは洪水の際、堤防の切れ目から水を上流方向に逆流させ、一時的に水を溜めて勢いを弱め、また元の流れに戻すしくみです。黒部川の霞堤は洪水の氾濫を1カ所だけで処理するのではなく、流域全体を考慮して機能するように設置されていました。

明治時代以降、黒部川は県の管理でしたが、1934年（昭和9）7月に大洪水になり、多くの被害を受け

ました。これをきっかけに、黒部川は国の直轄河川になりました。黒部川を管理する国土交通省 北陸地方整備局 黒部河川事務所の副所長、森田賢治さんに話を伺いました。

「黒部川は非常に難しい川です。川底を掘り下げ、さらに堤防沿いに水制^{注3}を設けたりして氾濫しないようにしてきましたが、その努力もむなしく1969年（昭和44）8月の大洪水により、橋が流され堤防も決壊し大きな被害に見舞われました。黒部川の特徴は、河床勾配がとても急で土砂流出が多いこと。洪水と土砂が一緒になって流れるため、護岸や堤防すら削られてしまうので、土砂のコントロールが課題です。一方で土砂をダムで止めすぎると海岸侵食が起きるなどの問題も抱えています。したがって当事務所では河川事業はもとより、砂防事業、ダム事業、海岸事業により、洪水を含め水や土砂（漂砂^{ひょうさ}）を一元管理しています。

現在、河川事業では縦工^{たてこう}（注4）と呼ばれる構造物を入れ、侵食に強い堤防を目指しています。砂防事業では、山の土砂が一気に流れ込むのを抑えるために各沢に砂防堰堤^{えんてい}を建設しています。海岸事業では、浜の浸食や高波による浸水を防止するため、

離岸堤などの整備が行なわれています。また、宇奈月ダムではダムに堆積した土砂を洪水の終わりに流す排砂^{はいさ}が行なわれ、洪水調節機能などの維持のほか、下流河川や海に土砂供給を行なっています」

私は全国の河川事務所を訪ねたなかで、このように流域の水や土砂の管理を熱心に、一元的に管理している事務所を初めて拝見しました。流域は管轄ごとに分断して管理するのではなく、山から海まで一体で考えて管理することが重要だと実感しました。

黒部川と向き合う子どもたち

黒部川扇状地に広がっていた複数の河道を本川一本にまとめ、用水路網に整備し直したことで、機能的な農業ができるようになりました。しかし、用水路は危険が多く、水辺で遊ぶには不向きです。水の豊かなこの地域で育つ子どもたちに黒部川の水の恵みを肌で感じてほしい。そう考えた黒部市内の小学校の先生たち。の働きかけで、1991年（平成3）に「くろべ水の少年団」が発足しました。会長の吉崎嗣憲さんに活動のきっかけを伺いました。

（注4）縦工
常に水が流れる流路より一段高い堤防際の寄州（よす）が急流に削られないようにするもの。

（注3）水制
洪水時の速い水の流れによって堤防が削りとられるのを防ぐため、堤防から川の中に向かって伸びているコンクリートの構造物が「水制」。その形状からピストル型、シリンダー型、ポスト型などがある。

（注2）ヨハニス・デ・レイケ
1873年（明治6）から1903年（明治36）の30年間、2度の帰国のほか日本に滞在。「淀川の改修」「木曾川の分流」「大阪港、三国港、三池港等の築港計画」など数々の業績を上げ、わが国の近代砂防の祖と称されている。



くろべ水の少年団の活動風景。子どもたちが黒部川上流で水生生物を採取している 写真提供：黒部市吉田科学館

「黒部川は危険だから行くな、ということが先行して、子どもたちの川離れが進んでしまいました。また、黒部は水がきれいというイメージだけが先に立ち、ほんとうはどんな水なのか考える機会がなく、子どもたちも無関心に……。市内の小学校や中学校の先生方が中心となり、活動をスタートしました。子どもたちがありのままの黒部川を感じてくれるような指導を心がけています」

私も過去に教育実習に行ったことがあります。環境学習に関するプログラムを実践するのがいかに難しいか、身に染みてわかります。

黒部市吉田科学館で事務局長を務

める梶木実さんには、活動内容を教えていただきました。

「活動は市内の小学校4〜6年生に呼びかけます。団旗やかっこいいTシャツがあり、団長もいます。水の少年団の事務局は当館にあって、子どもたちの学びをサポートしています。夏休みは、海から上流へと移動しながら5回ほど活動します。黒部川そのものがフィールドミュージアムなのですよ」

水の少年団というかっこいい名前には子ども心をくすぐるでしょう。団旗、団Tシャツ、団長などの演出もあり、私もちょっと大きな子どもとして入団したくなりました。



右：くろべ水の少年団の会長を務める吉崎嗣恵さん。発足当時からかかわっている
左：くろべ水の少年団の運営をサポートする黒部市吉田科学館の事務局長、梶木実さん

吉田科学館を拠点に、下流、中流へと川の視点を広げ、最後に上流を知るという学習プログラムは、身近な水を流域の視点で考えることができる、とても工夫されたものだと感じました。水の少年団がどんどん育つ黒部川の未来は明るそうです。

水が豊富できれいな黒部川ですが、時には私たちに自然の恐ろしさを突きつける二面性をもっています。

昔から美しい女性を「魔性の女」と呼ぶように、黒部川にも人々を魅了する美しさと、決して油断ならない恐ろしさがあります。元来、川とは恩恵をもたらす尊敬の念を抱く対象であると同時に、畏敬の念も感じる存在でした。そんな川らしさを黒部川に感じました。

(2015年7月16〜17日取材)



愛本橋付近の高台から見た黒部川と扇状地。本流の手前にあるのは主に入善町方面(黒部川右岸)の扇状地を潤す合口(ごうぐち)用水の取水口

2015年度 里川文化塾

5年目に突入した「里川文化塾」

<http://www.mizu.gr.jp/bunkajuku/>

ミツカン水の文化センターでは、2011年度から「使いながら守る水循環」を学ぶ「里川文化塾」を定期的に開催しています。水にかかわるさまざまな現場を訪ね、あるいはテーマに基づいて、その分野の識者や実際に活動なさっている方々にお話を聞くというスタイルで続けてきました。2015年度は計4回開催します。この号がお手元に届いたときにはすでに終了している回もありますが、今後、ご興味のあるテーマのときにはぜひご参加ください。

第20回里川文化塾

埋め立てられた運河から水の記憶をたどる

東京都中央区に残る運河や運河跡を辿りながら、「水の都」と呼ばれた江戸・東京の水辺の歴史と変遷について再認識することを目的に開催したものです。

江戸時代から明治時代、さらに戦後の復興と高度経済成長によって、水辺の利用はどう変わっていったのかを学びました。特に1923年（大正12）の関東大震災、戦後の残土処理、そして1964年（昭和39）の東京オリンピックの影響が大きいことがわ

かりました。

午前中は首都高速道路や公園として利用されているかつての運河・水路の跡を辿り、午後は一部に掘割（佃川支川）が残る佃島に足を延ばし、「水の都」を再認識すると同時に、埋め立てられずに残っている運河・水路の今後の利活用について考えました。

くわしい実施報告はミツカン水の文化センターのHPで公開します。そちらも併せてご覧ください。

日時：2015年9月26日（土）10:00～16:00

フィールド：東京都中央区

三吉橋→入船橋→築地川公園→佃大橋（石川島灯台跡と住吉神社の鳥居）
→佃島渡船場跡→住吉神社→佃小橋→佃波除稲荷神社の力石→佃公園

座学会場：タイムドーム明石

講師：馬場悦子さん（ばば えつこ） 中央区教育委員会 文化財調査指導員

参加人数：24名



三吉橋から見た首都高速の出口。ここはかつて築地川だった



左：隅田川から佃大橋で左岸に渡り佃島へ

右：佃公園から見た掘割（佃川支川）と石川島の高層マンション群

2015年度には第23回里川文化塾までを開催予定です。詳細が決まりましたらHPでご案内いたします (<http://www.mizu.gr.jp/>)

第21回里川文化塾

和泉川で学ぶ 多自然川づくり 実践のポイントと継承の課題

「多自然川づくり」の思想をいち早く実践した先進事例「和泉川」を舞台に、「実践のポイント」および「年月を経たあとの継承の課題」について学びました。当時の川づくりにかかわった講師2名をお招きし、現地もご案内いただいたことで、多くの知見を得ることができました。

日時：2015年10月17日（土）10:00～17:00

フィールド：和泉川（神奈川県横浜市西部）

座学会場：三ツ境「eモール」

講師：吉村伸一さん（よしむら しんいち）

株式会社吉村伸一流域計画室 代表取締役

橋本忠美さん（はしもと ただよし）

株式会社農村・都市計画研究所 代表取締役



和泉川の二ツ橋付近で駆け回る子どもたち

第22回里川文化塾

関宿で学ぶ、江戸時代の舟運と産業

利根川と江戸川の分岐点である関宿を舞台に、江戸時代の関東地方の物流ネットワークの全体像と舟運が果たした役割、当時の産業などを学びます。利根川の水位に異常がなければ、午後は川船「高瀬舟さかい丸」による利根川・江戸川・関宿水閘門の遊覧を予定しています。

日時：2015年11月7日（土）9:30～17:00

フィールド：千葉県野田市&茨城県猿島郡境町

座学会場：千葉県立関宿城博物館

講師：尾崎 晃さん（おさき あきら）

千葉県立関宿城博物館 主任上席研究員



関宿水閘門から見た江戸川流頭部（利根川との分岐点）

水の文化 Information

■「水の文化」に関する情報をお寄せください

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水のかかわり」に焦点をあてた活動や調査・研究などを紹介していきます。

ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根ざした調査や研究がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

■ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください。

<http://www.mizu.gr.jp/>

■水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページにてバックナンバーを提供しています。すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

■里川文化塾レポート詳細版は、ホームページで

里川文化塾のレポート詳細版は、参加できなかった方も楽しめる内容です。今後の企画についても、順次ホームページでご案内します。ご注目ください。

メールマガジン配信中！

「里川だより」

ミツカン水の文化センターは、時期やテーマに沿ったさまざまな「水の文化」にかかわる情報を盛り込んだメールマガジン「里川だより」を配信しています。

「里川だより」では、機関誌の発行や里川文化塾の募集告知など、センターからの情報をいち早くお届け。1人でも多くの人にご覧いただきたいと考えております。

メールマガジンの配信をご希望の方は、タイトルに「水の文化センターメルマガ配信希望」と記載して「tokyo-office@mizu.gr.jp」までメールをお送りください。

ご連絡をお待ちしております！

編集後記

水辺・水空間の効果を再認識し、水との距離を縮めてもらえたらと、この特集を企画しました。滝、小舟、日本庭園等、取材陣が感じたことは伝わったでしょうか。PC、スマホ等で視覚と聴覚中心の生活から、取材では少しだけ五感を解放できたかも。また疲れたら滝めぐりや庭園めぐりを実践したいと思います。(後)

坂崎さんの案内のもと滝を鑑賞すると、滝の前で30分なんてあっという間に過ぎてしまった。「耳に手を当てる」鑑賞法は是非お試し頂きたい。滝の音に満たされ、様々な感覚が研ぎ澄まされ、次々と滝を楽しむ独自の視点が生まれてきた。勿論、明日へのパワーもしっかり得られた貴重な経験となった。(松)

「水」＝「癒し」。漠然と思い描いていたイメージの裏側を、様々な視点から探ることが出来て面白かった。今までそんなふうを意識したことはなかったが、今度「水空間」を訪れた際は、水特有の景色の移ろいに目を向けて、もっと能動的な楽しみ方をしてみたい。(原)

今号を読むと、「自分癒やし」の旅に出たくなる。マイインドはもちろん、受け身の自分ではなく、能動的な自分。その活力は明日を生きるパワーになる。何事も自分で積極的に働きかけることが、現代を生き抜く知恵。休みの日は「自分癒やし」を楽しもう。(吉)

健康ランドの取材後に風呂に浸かったが、リラックスだけではない高揚感を覚えた。同好会や演劇など好きな目的のために集う人たちの顔は生き活きとして、その空気に触れたことが影響したのだと思う。入浴だけでは得られない、相乗効果のようなものが生まれる場を体感した。(力)

憧れのカヌーを支笏湖で初体験。パドル操作に手こずりながら恐る恐る湖面に漕ぎ出します。しばらくして戻ろうとしたけれど、見えない渦に巻き込まれたのかカヌーがまったく進みません。焦ってパドルを振り回し、湖水をたつぷり浴びてしまいましたが、その一瞬、締切もなにもかも忘れて夢中になっていた自分がいました。(前)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化 第51号

ホームページアドレス

<http://www.mizu.gr.jp/>

発行

ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川 1-22-15 茅場町中塾ビル 4F

株式会社 Mizkan Holdings

Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

お問い合わせ

ミツカン水の文化センター 事務局

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町 1-11-3 中銀 NM・5F

Tel. 03 (6264) 9471 Fax. 03 (6685) 7596

発行日

2015年(平成27)10月

企画協力 (氏名50音順)

沖 大幹 東京大学生産技術研究所教授

古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会

陣内秀信 法政大学教授

鳥越皓之 大手前大学副学長

中庭光彦 多摩大学教授

制作

後藤喜晃

松本裕佳

小林夕夏

原田朱野

吉田奈保子

編集製作

前川太一郎 編集

中野公力 デザイン・撮影

執筆

佐々木 聖 (pp.12-19, pp.24-26)

手塚ひとみ (pp.6-9)

開 洋美 (pp.10-11, pp.20-23)

前川太一郎 (pp.27-32, pp.36-37)

撮影

大平正美 (p6, pp.12-15)

川本聖哉 (pp.4-5, pp.9-11, pp.20-23,

pp.27-29)

鈴木拓也 (pp.30-32, pp.36-37)

中野公力 (pp.44-49)

藤牧徹也 (pp.7-8, pp.16-19, pp.24-26,

pp.38-43)

印刷

中塾総合印刷株式会社

※禁無断転載複写



ミツカン水の文化センター

表紙：東京・檜原村にある「神戸岩（かのといわ）」でくつろぐ。水が落ちる音、鳥のさえずり、セミの鳴き声……そんなものに耳を澄ましていると、あっという間に時間は過ぎていく（撮影・川本聖哉）

裏表紙上：湖面と空と山々に囲まれ、ゆっくりとカヌーを漕いでいく。この解放感がたまらない（北海道・支笏湖）（撮影・川本聖哉）

裏表紙下：新江ノ島水族館の「相模湾大水槽」の前で。大人も子どもも水空間に引き込まれている（撮影・大平正美）

